

---

# 転生アーンと異世界ライフ！

コノハ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生アースド異世界ライフ！

### 【Nコード】

N5089T

### 【作者名】

コノハ

### 【あらすじ】

私、神崎 奈緒。どこにでもいる高校生。正直であることだけを誇りに今まで生きてきた。ところがある日、とある事件に巻き込まれて死んでしまう。ああ、神様、正直に生きてきた仕打ちがこれですか？ よく考えたら殺される原因になったもの、正直だったからのような気がしてきた。

『あなたが死んだことを、神様は大変悔やまれております。転生先は決めませんが、特典がいくつかつきます』  
天使様が現れて、私にそういった。

記憶が引き継がれる「私」のままでいれること。  
別の人間に乗り移る形で転生する「成長するまで待たなくていい」ということ。

ラッキーとはかりに私は二つ返事でオッケーしたんだけど、転生先はとんでもないところだった！？ 私、いったいどうなっちゃったの！？

異世界で少女が頑張る物語ですっ！

## 最初の話〜転生について〜

夕暮れ、ごく普通の街並みを少女は歩く。

「……………」

お気に入りの鼻歌を歌いながら、少女は今日学校であったことを思い返していた。

朝登校した時に友達とあいさつしたこと。昼休みに大好きな人と少しだけおしゃべりできたこと。陸上部の練習でいい結果が出せたこと。クラブのみんなでおしゃべりしたこと。

そのどれもがふれていて……………そのどれもが、幸せに満ち溢れていた。幸せそうな表情で街を歩く彼女に、不幸という文字は似合わない。

「……………あれ？」

少女はふと立ち止まる。銀行の前だ。大きくも小さくもない銀行で、この時間帯だと言うのにシャッターがしまっている。少女が立ち止まったのは銀行の中から音が　それも、破裂したような勢いのある音がした気がしたからだだった。

「……………誰？」

少女は見た。銀行のすぐ隣にある路地、銀行の裏口から出る一人の男の姿を。

男は覆面をしていた。男はかばんを持っていた。男は拳銃も持っていた。

「誰だお前？」

男も、少女と同じ質問をする。……意味はかなり違うが。

「私は神崎 奈緒」

バカ正直に、少女 神崎 奈緒は答えた。男はにやりと笑うと路地から外れない程度に奈緒に近づき、手招きをした。つられて、奈緒は一步、近づいてしまう。

その瞬間、男は手に持った拳銃を、奈緒のほうへと向けた。

「！」

「黙って。こっちにこい」

奈緒と男との距離は距離にして約三十。よほど慣れた人間でないと、致命傷は与えにくい。にも関わらず、奈緒は黒光りする銃口が絶対致死の物だと錯覚してしまった。当たれば死ぬ。その恐怖が、奈緒を支配した。

「……ちよつとついてきてくれねえか、奈緒さん」

「ど、どうしてですか？」

「黙ってついてきてくれよ、何もしねえから。俺を助けると思っ  
て、な？」

「……そうですか」

少女は正直だった。そしてやさしかった。今までの人生、およそ嘘というものをついたことがなかった。ゆえに嘘をつくという発想は彼女にはなく、そして他人が自分に嘘をつくかもしれないという発想も、彼女にはなかった。

彼女はただ正直に、正直にと生きてきただけだった。嘘をつくな

かれ、人には優しくあれという死んだ両親の教えを守って生きてきただけだった。

もし、彼女が嘘をついていたら。正直でなかったら。他人が自分に嘘をつくかもしれないという懸念が彼女のなかにあったら。

「ついてこい」

「……はい」

『何もしない』なんて嘘に、奈緒が騙されるはずがなかっただろう。撃たれるのを承知で、逃げ出す勇気ぐらいはわいたかもしれない。しかし、そうはならなかった。……ならなかった。

彼女は愚かにも、銀行強盗をしたばかりの男に近づいてしまい、そしてその結果。

彼女は 。

「……」

奈緒の意識が戻ると、彼女は見知らぬところにいた。

彼女は自分がどこに立っているのかを確認して、驚く。雲の上？  
どうして私が？ 自分の姿を確認する。何も変わらない。さつき  
と何も変わらず、普通の自分に、かばんに、学生服。変なところは  
一つもない。

「ここは……」

どうしてこんなところに私はいるのだろうか？ そんな簡単な疑問  
にも、彼女は答えを見つけ出せない。

雲の上。わかつているのはそれだけだ。他にあるものと言えば遥  
か高い青空と、煌々と照る太陽だけだ。

「……私、死んだのかな？」

ふと、思い出す。そう言えば男の人について行って、椅子に座ら  
されてからの記憶がない。確かあの人、棍棒みたいなのを私の頭に  
ぶつけてきた。だから私は死んだのだろう。

彼女はロジックを組み立てていくように、自身の死を理解した。  
痛みや苦しみは、今の彼女には思いだせない。思い出したせないま  
までいいと彼女は思った。まだ彼女には、死んでしまったというこ  
とに対してのショックは感じない。まだ、半ば夢うつつ。

「……てことは、ここ、天国？」

こんなきれいなところが地獄なわけがない。彼女は簡単に結論付  
けた。

「死んだ、死んだのかあ……私が……死んだ」

死ぬ、ではなく『死んだ』。自分がそう言える状況と言うのが、

ひどく滑稽に思えた。そうだ、私は死んだ。のに、考えることができる。自分はまだ、ここにいる。……生きている時は、あれほど死ぬことが、自分がいなくなることが怖かったのに、実際に訪れてみれば案外、怖くもなんともない。そう奈緒は思った。

「結構意外ね。私って、こんなに武感情だったかしら。……とい  
うかお迎えまだなの？」

少しいらついたように彼女は呟いた。なんでこんなだっただけの空間に一人置き去りにされねばならないのだ。せめてお迎えの一人や二人、来てくれてもいいじゃないか。  
彼女はあたりを見回しながらそう思った。

「……まゝだ誰も来ない。……ホントにここ、私だけなの？  
……気が変になっちゃいそう」

それとも、気が触れるまでここにいろということなのだろうか。

……そんなのはまっぴらごめんだ。  
奈緒はあたりを歩き始めた。もしかしたら人がいるかもしれないと思ったからだ。歩くというよりはするべろのような感覚がしたが、奈緒は気にならなかった。

「……誰もいない。……死後は一人つきりってこと？ 嫌よ、そ  
んなの」

「大丈夫ですよ」

「ひゃっ!？」

後ろからいきなり声をかけられて、奈緒は飛び上がった。後ろを振り向いて、さらに驚く。



「あ、あ、あなた……!?!」  
「こんにちは、神崎 奈緒さん。はじめまして、私の名前はアークと申します」

アークと名乗った青年は、恐ろしいほど神々しかった。そして、凄まじく整った顔立ちをしていた。人間の顔を完璧な形にすれば、こうなるのではないだろうか。完璧な容貌には、満面の笑みが浮かんでいる。頭の上には天使の輪っか、背中には大きな翼が六対十二枚。着ているものは布一枚だが、それがまた神々しい。天使の布とでも言うのだろうか？　こころなしに後光もさしている気がする。

「あ、アーク……さま？」

「様はいりませんよ。アークとでもおよびください」

「……アーク？」

「はい」

アーク？　……どこかで聞いた名前。奈緒はそれ以上考えなかった。天使の名前よりも、今は聞きたいことがたくさんあったからだ。

「私、死んだの？　どうして？」

「覚えていないのですか？」

「……うん」

「……」

アークは笑顔から一転、気の毒そうに顔を伏せた。奈緒はその表情を見てさらに不安になる。

「あなたは殺されました。……銀行強盗に」

「……そう」

殺されたと聞いても恨みや怒りは湧いてこなかった。なんだかもうそんな感情はどこか遠いことのように、いまいち実感が無い。…どうしてだろう？ 奈緒は疑問に思ったが、それだけだった。

「私の死体、見せてくれる？」

「……あなたの遺体は、その、激しく損傷されています。見ない方が精神衛生上よろしいかと」

「……口頭でいいから、教えて」

自分の身体の死に様ぐらい、知りたい。そう思ってたことだったが、すぐに後悔することになる。こほん、とアークは咳払いを一つすると、気の毒そうに言葉を発した。

「そうですね。あなたは……」

アークは嫌々、奈緒がどうやって殺されたかを懇切丁寧に教えていく。最初こそなんでも無い風に聞いていた奈緒だったが、次第に顔色が悪くなっていく。

「……と、いう感じですね」

「そこまで詳しく言わないでよっ！」

涙目になって奈緒は叫んだ。

「……これは失礼」

「もう過去のことだからいいけどさ！ というか、なんでそんなに私、壊されてるの？」

「……壊されてる、ですか」

アークは心中で驚く。ほんのさっきまでただの高校生だった少女

が、自身の遺体を『壊されている』と形容するなんて、珍しいことだからだった。むちゃくちゃにされたことが、彼女の心に変容を与えたのだろうと彼は推測した。

「そうよ！ その男、なんかの性的嗜好が……って、私、その、生娘のままよね？」

「え、ええ、一応は」

「……嫌な言い方ね」

「大丈夫です。あの男はあなたに手を出しませんでしたから」

ふう、と奈緒は胸をなでおろした。大好きな人がいたのに、銀行強盗なんかには純潔を散らされていたのではたまったものではない。

「話戻るけど、なんで私あんなに壊されてるの？」

「さあ？」

「はい？」

二人して疑問符を浮かべる。

「私には異常者のことはわからないので」

「あなた、天使よね？ 人間のことはすべからく理解しているんじゃないの？」

「善人なら、理解できますよ。あなたのような」

「……！ ほ、誉めてもなんにも出ないんだからね！」

顔を真っ赤にして奈緒は顔をそらす。かわいらしいな、とアークは微笑んだ。

「ほめてなんかいませんよ。天使や神は善人しか理解しません。だから、悪人を『地獄』に放りこみ、隔離するのです。あなたは理

解できる人種です。……だから、ここにいるのですよ」

「……」

「まあ、こんなところで話していても埒があきません。本題に入りましょうか」

「……天国に行くの？ それとも、生まれ変わり？」

アークは首を振った。

「あなたは今までずっと正直に生きてきました」

「……うん」

奈緒はそれが原因で殺されたのにも関わらず、後悔はしていなかった。確かに、皆が皆嘘をつかないわけじゃない。親からも、友達からも言われていたのに、とっさには思いつかなかったのだ。まさか、男の言うことが嘘だったなんて。しかし、奈緒はそう思う一方で今まで嘘を吐かないでよかったとも、思っている。嘘をつかなかったからこそ親しい人間からは信用されていたし、親交も厚くなっていた。友達も多く、両親の教えを守っていたから、自分の人生に誇りも持てた。

「しかし、その結果、あなたは無残に殺されてしまいました。このことを神は大変悔やまれております」

「……そうなんだ」

神様でも後悔したりするんだ。と奈緒は感心する。信仰に疎い彼女はギリシャ神話や日本神話を読んだことがなかった。

「ええ。まあ、ですので、転生して二度目の人生を、と」

「ホントに!？」

思いがけない生還のチャンスに、奈緒は目を輝かせた。また、生きられる。また、再び人生を歩める。彼女は希望に胸をふくらませた。

「はい。転生先はすでに決まっています。けれど、転生先はいろいろともんだ……ややこしいので、いくつかの恩恵が付くこととなっております」

「……恩恵？ 特殊能力とか？」

「いえ、それは……。なんでもありません」

一度口ごもったが、アークは気を取り直して咳払いをした。

「では、特典の内容を。」

その一、転生先ではあなたの意識をそのまま入れますので、記憶は引き継がれます。

その二、転生先はすでに成長した人間なので、成長を待つ必要はありません。

「……以上です」

「へえ〜。すごい！」

奈緒は目をキラキラさせながら言った。そのままの心、特殊な人生。とても魅力的な提案だった。

「転生しますか？」

さながらゲームに出てくるキャラクターのように、アークは訊いた。

「はい！」

間髪いれず、即答。

「……………わかりました。あなたの名前はクリア。クリムネア・スターライト」

「……………クリア？」

外国人だろうか？ というか、スターライトって……………『星の光のクリムネア』？ 変な名前。

奈緒は不安になる。言葉を覚えなくても大丈夫だろうか？ とか、文化違っても大丈夫かな？ そういえば、またみんなに会えるかな、とか。よく考えれば考えるほど、不安になってくる。

「では、転生後の人生、どうかお楽しみください」

不安になったところで、もう取り消しはできない。

「う、うん」

ぼつ、と奈緒の周りに光がとる。

「それと、一つ警告を」

「え？」

「転生にはいくつかの特典があります。が、転生後の人生は、頑張ったあなたへのご褒美というわけでも、正直なあなたへのプレゼントというわけでもありません。あなたへのご褒美は人生をそのままやり直す、ただそれだけです。苦痛も快樂も、苦勞も安樂も、不幸も幸せもそっくりそのままありますので、どうか、お忘れなきよう」

転生し、新たな人生を歩もうとしている奈緒……………クリアへなりつつある少女に、アークが深々と恭しく、一礼。

「では、次の人生こそ、長く生きていけるといいですね」  
「……どうも、ありがとうございます」

ある意味残酷な見送りの言葉だったが、奈緒はお礼を返した。

「いえいえ。あなたほど正直な人間、久しぶりに見たものですか  
ら。つい、敬意を払ってしまいました。……それと、これは忠告で  
すが、次の人生で正直に生きることはあまりお勧めしません」

「はい？」

なんで天使が嘘を奨励するの？ 奈緒は疑問に思った。

「一度学習したはずです。正直に生きても損をすると。……嘘を  
つくなど、下界ではもはや日常茶飯事で、当たり前のことです。…  
…おっと、下界ではありませんね」

「はい!？」

また、疑問が増える。下界ではない？ ではどこへ？ 光が強くな  
って、奈緒の視界全てが光に隠れる。

「言ってませんでしたか？ あなたの転生先は、異世界ですよ」

「……聞いてませんけど」

「そうですね。まあ、転生先なんてめったに聞けるもんじゃあり  
ませんし、ここは我慢してください。では、よい人生を。……行っ  
てらっしゃい」

「ちよ、まだ聞きたいことが……!」

異世界とはどういうことか。またみんなに会えるのではないのか。  
またみんなと一緒に学校に通えるのではないのか。そんな疑問を、

一つ一つ答えてほしかった。しかし、アークを止める間もなく、奈緒の全てが光に包まれ、そして

奈緒の魂は、転生した。



転生した、その先は？

「アークっ！」

奈緒　クリア・スターライトとなった少女はどこにも存在しない青年の名前を叫んで飛び起きた。

「えっ」

彼女はあわてて自分の喉を押さえた。つい昨日までの自分と、あまりにも声が違ったからだだった。

そして、同時に思い出す。殺され、アークと出会い、そして、異世界に転生したことを。

「わ、私……」

自身の身体を見て、奈緒だった少女は驚いた。ピンク色の花柄パジャマから見える両手は、白く、ほんのりピンク色で、指が長く、ほっそりとしている。ふと興味がわいてきて、少しパジャマをめくってみた。別段細いというわけではないが、腕は脂肪がほとんどなく、筋肉でひきしめられていた。今度はおなかをまくりあげる。この辺は生前とあまり変わらないが、ふと、彼女は違和感を覚えた。

「……」

ついきのうまであった双丘がない。まっ平らである。少し体のポテンシャルが下がった様な気がして奈緒だった少女は悲しくなった。事実から逃避するように周りを見渡し……そして、気づく。

「……ここ、どこ？」

朝日が差し込む部屋を彼女は見回す。ぱっと見た印象は生前の部屋と変わらない。ベッドで眠り、本棚があり、机があり、押入れがあり、クローゼットがあり……。アークが異世界どころ言っていた割に、ごく普通の日本家屋だった。てつきり木と藁でできた家に、魔法や超能力が使える世界を思い描いていたのだが、この部屋の様子を見る限り、そうではないようだ。

「……とにかく、外に……」

すぐには慣れない自分の声に戸惑いながらも、奈緒はベッドを降りた。何か超常現象が起きるのではと奈緒が心配していた割には、何事もなく扉までたどり着いた。しかし、奈緒の手はなかなか扉に伸びなかった。新しい世界で全く見知らぬところへ出るのだから、ためらうのも無理はない。

もし、外に出て、今までとあまりに違う世界だったら？

その疑念が、奈緒の脳裏から消えることはなかった。素晴らしい世界だったならまだいい。だが、そうでなかったら？ 思わず吐き気を催してしまうようなほど醜悪な世界だったら？

その時は、死ねばいい。

……え。

奈緒は思わず自身の胸を押さえた。今、自分が思ったことが信じられなかった。

「……死ねば、って……」

何よりも恐ろしかったのが、『この世界が自分にとって都合が悪

ければ死ねばいい』という考えが忌避できない、ということだった。生前は自分の命を自分で断つなどやってはならないことだ、と思っていたというのに、今は自殺に関して忌避や拒否の想いは全くいっていいほどなかった。奈緒はそれに戸惑う。

「……大丈夫、きっと、きっといい世界だから……」

その戸惑いを黙殺し、なんの根拠もなしにそう自身に思い込ませ、奈緒は一気に扉を開いた。

「……」

予想していたような醜悪な世界はそこにはなく、かといって美しい世界があるわけでもない。リビングに続く廊下があり、そのさらに先には玄関が見える、どこにでもある一般家屋だった。

「……ほ」

彼女は胸をなでおろした。きっと神様が、混乱しないように元の世界に近い世界を選んでくれたんだ、と今となっては異世界の神に彼女は感謝した。もしかして、元の世界なのかも、などという他愛もない想像も同時にした。

すっかり安心した奈緒はリビングへと入った。キッチンがあり、ちゃぶ台があり、テレビがあり、ソファがあり。一人暮らしにしては広い部屋だったが、ものが多いので彼女一人で暮らすにもびったりだ。

「……あれ、用意いいな」

奈緒はちゃぶ台の上を見て、少し驚いた。朝食の準備がすでに

きていたのである。これも神様の計らいだろう、と彼女は思うと、食器棚から箸を探して取り出し、座布団のようなソファに腰掛け朝食を採り始める。ちゃぶ台にはご丁寧に『転生後について』という小冊子まで置いてあった。行儀が悪いと思いつながら、彼女はそれを見ながら食事をする。

「……ふむふむ、ほうほう」

小冊子の内容は以下の通り。

一、異世界から来たことを誰にも話さぬこと。信用に足るとあなたが判断した場合は除く。

一、この世界の掟に従うこと。信念に背くとあなたが思ったなら守る必要なし。自己責任。

一、自己の能力を過信しないこと。調子に乗って好き勝手するなど言語道断。

一、恋人を作る時はよく考えること。後悔しないように。

一、この世界から逃げたくなった場合、生徒会長を頼ること。楽に殺してくれるはず。

一、あなたが通う学校は『公立魔法・超能力総合学園』高等部二年三組。多少の齟齬は感じるだろうが、気を強く持つて。私服だからそのままで行ってもかまわない。八時までに登校厳守。七時半に出て、何も考えずに感覚で進めば、後は体が教えてくれる。

一、敵はためらわずに殺すこと。情けをかけても意味はない。

「……」

最初こそ神様らしい忠告文だな、とほほえましい表情を作っていた奈緒だったが、後半になるにつれ、その表情はいぶかしげになっていく。

楽に殺してくれる？ ためらわずに殺す？

何を言っているのだろう。まさか、と彼女は思った。まさか、この世界は人を殺すことを容認するような世界なのだろうか。

何度小冊子を見返しても、その答えは書いていなかった。書いているのは上記の七条のみだった。

「……………わかんないなあ……………」

とりあえず奈緒は、小冊子に言われたとおり、学校に行くことにした。食事を終えた奈緒は寝ていた部屋に入って服を着替える。パジャマを全て脱ぎ、下着姿になる。無地の白色下着で、色気もなにもあったものではない。さらに怪訝な表情を深める彼女だったが、クローゼットの中を見ると、その表情は明るくなった。

「うわあ……………」

色とりどりの、きれいな服がたくさん敷き詰められていた。そのどれもが新品同様で、まるで買ってきてそのままたんでクローゼットに入れたような感覚さえしてくる。

「どれがいいかな……………」

神様はなんて優しいんだろう！ 彼女は好みの洋服を選びながら、神に再び感謝した。

「ええと、鏡、鏡……………」

姿鏡はクローゼットのちょうど反対側にあった。どうしてこんな不便なところに、と思った奈緒だったが、多彩なおしゃれができることに比べれば、些細な問題だった。言われた七時半にはまだ時間

がある。うんと綺麗にして行こう！ 気に入った服を持って、彼女は姿見の前に立ち……硬直した。

「……え」

自分はまだ、『クリア』のちゃんとした容姿を一度として見ていなかった。しかし、ある程度の想像はしていた。綺麗な細い手に、なだらかな胸。けれど体は健康的。容姿も体に見合っていて……そう思っていた。

けれど。

たしかに、表情は活発的で、『奈緒』そのものの快活さがよく出ていた。しかし、それだけである。高校生、そう名乗るにはあまりにも大きさが足りない。そんな印象を受けた。『奈緒』の快活さが、より『クリア』の子供っぽさを強調しているとさえ思えてくる。髪の毛の色もおかしく、白髪頭に黒髪が少しまじっている。瞳の色も生気がまるで感じられない闇のような漆黑。

「……」

想像と大きく違った『クリア』の容姿だが、『奈緒』は驚く程度にとどめて服を着替え始める。少し蒸し暑いので、緑のタンクトップに青のジーパンというラフな格好になってしまったが、幼い体型をしている『クリア』にはぴったりだと彼女は思った。

「よし、行こう！」

たしかに、ちょっと『クリア』の体を見て驚きはしたが、それがなんだというのだ。『奈緒』はベッドのそばにたてかけてあったカバンを持ち、部屋を出ると靴を履いて一気に外に出た。多少恥ずかしいと自覚しながらも、感覚に全てをゆだねて走る。

これからは私はこの世界で暮らしていくんだ。もう、前の世界には……戻れない。

そんな想いが、走っていると生まれてくる。陸上部だった彼女は毎日『奈緒』の身体を使って走っていた。だから、体の調子が悪ければすぐにわかった。逆に、体が今どんな能力を発揮できるかも、だいたい走ればわかる。

『クリア』の身体はとても優秀だった。早く走れて、そして疲れない。筋肉が多いのか、軽いからか。どちらにせよ、『クリア』の身体は『奈緒』にはよくなじんだ。運動音痴なわけでも、太っているわけでもない。元の世界に対する未練、悲しみ、それらがなくなっただけではないが、この世界に対する不安は消えた。だから、彼女はこう思った。

きつとこの世界で、私はうまくやっていける！

……まだ、この世界の住人に誰一人として会っていないというのに。

転生した、その意味は？

何も考えず走って、気がつけば周りの景色がすっかり変わっていることに気がついた。閑静な住宅街から、何も無い大きな道に。奈緒の正面には校門らしき門柱があり、そこには仰々しい文字で『国立魔法・超能力学園』とあった。

「…………ふわあ…………」

奈緒はその胡散臭い名前に驚くと同時に、学園の敷地の広さに目を奪われた。右を見ても、左を見ても、次の曲がり角は遙か遠くにあつて、それまでは平坦な一本道が続くばかり。少し視線を上げると、まるでビルのような建物が敷地内にいくつも点在している。まるで、一つの街のようである。

「…………クリア。久しぶり」

「え？」

急に肩に手をかけられて、奈緒は振り向く。

振り向いた先には、子供のような身長少女がいた。頭の赤いリボンや、白い薄手のキャミソール、白磁のように白く、細い全身が幼い印象を一層強める。

「…………どうしたの？ 私のこと、忘れたみたいな顔をして。何かあったの？ あなたがこの前言っていたように、また趣味がはじまったの？」

「え、え？」

小さく、儂い声だが、その勢いは強かった。それに気圧され、奈



緒は戸惑うことしかできない。

「……そう。何があったの？ 私に全てを見せて。ね？」

「え」

す、と少女は右手を奈緒の額に当てた。

「……見えない。やはり私にサイコメトリーはないのね。ほしい能力なのに」

「な、何の話？」

サイコメトリー。奈緒はそれを聞いたことがあった。手で物や人に触れて、過去の事象を読みとる能力のことだ。それが、『ほしい』？ 奈緒には、少女が何を言っているのかさっぱり理解できなかった。

「とりあえず、中に入ろうよ。そろそろ授業が始まってしまおうよ」

「え、あ、うん……」

優しく奈緒の背を押しながら、少女は学園の敷地に入っていく。

ブウン。

二人が門をくぐったと同時に、そんな音が奈緒と少女の頭の中で響いた。

『魔法・超能力科、クリムネア・スターライトの登校を確認』

『超能力科、たたり崇 真登香まごかの登校を確認』

崇 真登香。奈緒は少女の名前をもう一度心の中で復唱する。ど

う考えても漢字の名前である。奈緒が転生したのはクリアという西洋風の名前なのに、なぜだろう。『クリア』<sup>自分</sup>が特殊なのか、それとも崇 真登香が特殊なのか。

「……やっぱりこれ、頭に響いて嫌だね」

「え、そ、そうかな？」

奈緒にはむしろ心地いくらいの音と声だったのだが、少女はそうではないようだ。

「クリアは魔法使えるからかな。きっと、頭の中に異物が入ってくるのに慣れてるんだと思う」

「……そんなことないよ」

「そうかな？ でも、やっぱり魔法適性ある方が今便利だから」

奈緒にとって、自分が魔法を使えるようになったただなんて初耳だし、慣れるどころか今初めて聞いた声だったのに。

敷地内に入ると、あらゆるものが外から見たときよりもずっと大きく見えた。ビルにしても、広さにしても、だ。なぜだろうか。と奈緒は疑問に思う。二人は、広々としたグラウンドの端に整備された道を通り、おそらく校舎であろうビルに向かった。

「……やっぱり、魔法科や魔法・超能力科の人はいいなあ、魔法使えて。最近、魔法研究ばかり進んで、魔法技術が溢れてるのに私の魔法適性がゼロだなんて。これじゃあ卒業しても就職見つかるかな……」

「え」

超能力云々を言っているが、悩みの内容はまるで、奈緒が元いた

世界のようにだった。この学科で就職はあるのか、この先どうなるのか。奈緒が想像していたような、異世界の超能力や魔法を使って日々訓練する少女少女の悩みとは全く違って、なんだか不思議なような、可笑しいような。

「クリアはどう思う?」

ビルの中に入りながら、崇 真登香が奈緒に聞いた。ビルの中は、掲示板やお知らせ、地図などが進歩している以外には奈緒のいた世界と変わらない。ただ、高さや広さがけた違いだったが。

「え、ええっと、私も、不安かな、やっぱり。いくら魔法を使っても、就職できるとは、限らないし」

そのけた違いの広さと高さを驚く暇は奈緒になかった。それよりも、突然話しかけられた崇 真登香との会話に集中することの方が大切だった。いきなり話しかけて、そしてここまで会話をしてしまった以上、無下に断って嫌われたくない。けれど、自分が異世界から転生したことを知られるわけにはいかない。その間に揺れる奈緒が、会話を片手間に校舎の違いを楽しめるはずがなかった。

「……やっぱり、魔法・超能力科最強でも、そう思うのかあ」

「う、うんうん」

魔法・超能力科最強という単語に引っかかったが、奈緒は深く突っ込まれた。『なんで知らないの?』と訊かれてぼろをださない自信がなかったからだ。

「やっぱり、魔法特化社会に変わりつつある世の中、魔法科の間が一番就職率高いのかな……」

「う、うん、そうなんじゃない……?」

魔法特化社会とかよくわからない単語も、今は流す。家に帰ってからインターネットで調べればいいや、という軽い見通しだったが、今の奈緒は、それのおかげでボ口を出さずに済んでいるようなものだ。

「そういえば、昨日の事件、聞いた?」

「え、何?」

急に時事的な話題を振ってこられても、と奈緒は思ったが、この世界の時勢を知る絶好の機会だと、話題を変えさせないようにする。

「あれ、知らないの?」

「うん、昨日、ニュース見てなかったから」

この世界にもテレビはあった。おそらく今でもニュースで情報を仕入れている……はず。奈緒はそう考えた。もしそうでなかったら終わりだが、分の悪い賭けには思えなかった。

「そうなんだ。元、学園魔法科のOBが一家惨殺事件を起こしたの」

「……学園魔法科?」

学園って、どこの学園? 何も知らない奈緒は、素直に聞き返してしまう。

「そう。ここの魔法科の、しかもエリートが、魔法も超能力も使えない一般人に魔法を使ったの。そこら辺の三流学校が起こした事件なら、『監督不行き届き』で済ませられたんでしょうけど、さすが

に国立出の魔法使いが事件起こしちゃね……」  
「どうなるのかな？」

奈緒は当たり前障りのない程度に質問をする。

「さあ。多分、運が悪かったら、じゃなかった、裁判の結果次第じゃ『魔法や超能力は使ってはならない力だ』っていう考えが一般人の間で浸透するかも」

「そんなことになったら……？」

どうなるのだろうか？ 奈緒は全く想像がつかない。

「想像を絶する事態になると思う。きっと、私たち『魔法使い・超能力者』狩りが始まるわよ。……といっても、魔法も超能力も持っていない連中が一体何を武器に向かってくるのかわかんないけど」  
「……その、科学兵器とか」

奈緒が恐る恐る言うと、崇 真登香は鼻で笑って否定した。

「そんなのあるわけないでしょう。科学なんて、弱いし非効率だし。利点って言えば『誰にでも、理屈を知らなくても使える』一点だけ。しかもその利点が仇になって、誰も努力しなくなったから廃れたみたいなものよ？ 誰が好き好んで使うのよ」

「……でも、核とか」

「核？ ……クリア、昨日SFでも読んだ？ それこそまさしく諸刃の剣じゃない。使った瞬間世界が滅ぶ、だなんて」

奈緒が魔法や超能力について無知、あるいは偏見があるように、

崇 真登香、いやこの世界の人間は科学について無知、あるいは偏見があるようだ。

「そうだよ、諸刃の剣だよ」

嘘は言っていない、と奈緒は自分に言う。核や科学が諸刃の剣であることは確か。なら、嘘を言っていることにはならない。生前は正直なことが原因で死んだにも関わらず、奈緒は生き方を変えようとは思わなかった。そもそも『クリア』だと名乗ることそのものが嘘であるのだが、奈緒はそれを『もう自分はクリアだ』と思いこむことで忘れていた。

廊下をしばらく歩くと階段があった。魔法使いでも階段を使うのか、と疑問に思いながらも奈緒は崇 真登香に連れられ階段を上る。

「そうそう。そもそも、今の世の中魔法から離れて暮らすことなんて不可能よ。水の供給にさえ魔法使ってるんだから」

科学技術と魔法がそっくりそのまま入れ替わったような世界だなあ、と奈緒は思った。

四階まで上がると、広い廊下にくくも教室が見えた。そのうちの一つ、二年三組の教室に崇 真登香は向かう。

彼女は教室の扉を開けた。

「おはよう、みんな」

「お、おはよう」

教室は奈緒が生前通っていた学校とは少し違っていた。大きな丸い窓には、ガラスではなく虹色に光る何かシートのようなものがはめ込まれていた。電灯はなく、あるのは大きな魔法陣だけ。魔法陣が綺麗に輝いていて、明りの代わりをしているようだ。床も壁も、廊下と同じ材質できていて、整った印象を持つが、どうも温かみがない。各人に与えられるものだけが奈緒の生前と同じく、木の椅

子と木の机だった。

奈緒が挨拶をすると、何人かが彼女のことをいぶかしげに見た。

「ど、どうしたのかな？」

「クリアが変わったからでしょ」

「……え」

変わった？ それを、知っているの？ 奈緒は不思議に思った。変わったと思っっているのに、どうして祟 真登香は離れたり、質問したりしないのだろうか。

「……今回はそんなキャラ？」

「な、なにが」

「……やれやれ。趣味もいいけど、いちいち付き合わされるこっちの身にもなってよね」

奈緒が不安そうに聞くと、祟 真登香は肩をすくめて首を振った。

「あなた、定期的に性格を一変させる趣味を持つてるのよ。……」

これで満足かしら、クリア？」

「え、あ……その」

知らなかった。自分がそんな趣味を持っていたなんて。

……と、そこまで思って、奈緒は気づいた。気づいてしまった。

……あれ。そう言えば、どうして私、こんなに居心地が悪いんだろう。

その理由は何か。考えてみれば簡単だ。

もとからある程度成長していた。元から学校、その他社会的地位を持っていた。いきなり友達のような関係の少女がいた。『クリア』は趣味を持っているという。

……まさか。

奈緒はいまさらながらそれに気づいて、多大な恐怖と罪悪感に包まれた。

……『奈緒』が『クリア』になる前も、『クリア』は生きて、生  
活していた？ ……つまり、『奈緒』は『クリア』を……乗っ取っ  
た？

奈緒の背筋に冷たいものが流れた。



## 転生する、その重み

「……あ、う……」

奈緒は自分がここにいることの意味を、知ってしまった。気づいてしまった。

奈緒がここにいる、ここに存在している、ということは、誰かがいないということ。誰かが存在しないということ。

「どうしたの？ クリア」

「あ、ああ……」

真登香が名前を呼ぶ。けれど、それは生前慣れ親しんだ自分の名前ではなく……どこの誰とも知らない、誰かの名前。自分が乗った、誰かの名前。

「あ……う……」

「顔色悪いよ？ 大丈夫？」

大丈夫。奈緒はそう言おうとしたが、自分がここにいるということの意味が重すぎて、全身が凍ったように動かなかった。

「……本当に大丈夫？」

「……」

ついに、奈緒はその場にへたりこんでしまった。力を急に抜いたので、お尻を床にぶつけてしまった。けれど、全然痛くない。『クリア』の身体が、軽すぎるのだ。軽すぎる体、力強い体、全く知らない友達。それらは奈緒が今存在している『クリア』の体が『他人

の物』だということをし、否が応でも認識させる。すさまじい後悔の念が彼女の意識を包む。

「……………わ、わた、私は……………」

私は、『クリア』を乗っ取った？ ……いや、殺した？

奈緒は自分の手のひらを見つめた。綺麗な、白い指だ。……………でも、これは他人の物だ。奈緒が『奪い取った』ものだ。血は一滴たりとも流れていない。けれど、奈緒は確かに、自分が殺人者になったのだと自覚した。

「本当に大丈夫……………？ クリア、今日ちょっとおかしいよ？ いつもと違う……………」

「……………！」

奈緒はたまらなくなって、とにかく真登香の目から逃れようとかけだした。

「え、ちょっと、クリア！？ もう授業始まるよ!?!」

「……………！」

逃げようと教室から出ようとした奈緒だったが、出入口のところで誰かにぶつかった。

「あ、う、ごめんなさい……………」

誰にぶつかったか確認する前に、奈緒は教室の外に出ようとした。とにかく、今はこの教室……………『クリア』の友達がいる場所から離れたかったのである。

「……待ちなさい」  
「ひっ」

泣きながら教室を出ていこうとする生徒に向けた気遣いも、今の奈緒には咎めだてするようにしか聞こえない。

「……泣きながらどこへ行くの？ ……それに、もう授業が始まるわ。何かあったというのなら、話を聞くけれど」  
「え……あ……」

ずいぶんと優しいげな声に、奈緒は顔を上げた。眼鏡をかけ、白衣を纏った妙齡の女性。教育機関にいる大人の身分は、そう多くない。

「……そんな怯えた顔をしないで。それも演技？ それとも、本心？」

「あ、あなた、は……」

いつくしむような表情を向けられて、奈緒は少しだけ、ほんの少しだけ安心した。

「私？ あなたの担任よ。忘れた？ それとも、この学園一の魔法使いには、教師の名前は覚えるに値しないって？」

「ち、ちが、ちがい……」

すつとからかうように細められた目の意味も、奈緒には恐怖の対象だ。震えながら、後ずさる。

「……様子が変ね。……クリアさん、何か変なものでも取り込んだ？」

「……？」

担任の言葉に、奈緒は雷にうたれたように動かなくなった。

「……やれやれ。いつものこととはいえ、いちいちひやひやさせられるこっちの身にもなつてね。『浮遊 フロート』」

担任が指を杖のようにして振ると、固まっている奈緒の身体が浮いた。そのまま担任は指を動かし、窓際の席に座らせる。ここが、奈緒の『クリア』の席なのだろう。

「はい、授業始めるわよ！ 今日みんな、クリアさんに負けな  
いよう、頑張つてね」

教室の一番前にある教卓に立つと、担任は当たり前のようにそう  
言った。

「……え」

「どうかしたの、クリアさん？」

驚いて声をあげた奈緒に、担任がすかさず聞く。彼女は『クリア』  
の演技はいつものことだと思っているが、泣きながら教室を飛び出  
そうとしたのには何か理由があると考えていたのだ。それを聞くき  
っかけをつかむため、彼女は『クリア』の動向には注意していた。

「な、あ、なんでも、ない、です……」

「……ふうん。今度は清純派おど系？ また魔法の知識を一  
から教えないといけないの？ ……全く、からかつのもほどほどに  
してね？」

「え、あ、え……？」

奈緒は担任が何を言っているのか、さっぱりわからなかった。『また魔法の知識を一から』？　どういうこと？　奈緒は疑問を浮かべる。さっきまで、担任は『クリアに負けないように』と言った。それなのに、『魔法を一から』。まるで矛盾している。けれど、担任も、他のクラスメイトも、そのことにまるで驚いた様子はない。

もしかして、もう、バレてる？

ぞわり、と奈緒の肌が逆立った。彼女の脳裏に、朝に見た小冊子の内容が思い浮かぶ。

異世界から来たことは、悟られてはならない

もし、ばれたらどうなるのだろうか？

奈緒はなぜか、それが想像できなかつた。嫌な予感はあるが、具体的に何をされるのかを想像しようとすると、頭が霞みがかつたようにぼやけるのだ。まるで、その答えを見つけまいとするように。

「ま、いいわ。したり顔で魔法講釈されるよりは、数百倍マシだし。今日は初心に立ち返ったつもりで、基本的なところからやりましょうか」

はい、と同意する声が教室のそこかしこで起こった。

「……何が……起こってるの？」

奈緒は不思議だった。なぜ、ここまで普段の『クリア』とは違ふとわかっていながら、どうして誰も『クリア』ではないという結論に至らないのだろう。科学の世界なら簡単には発想されないだろうが、ここは魔法の世界。普通に考えれば乗っ取られた、とか魔法で性格が変わった、とか思いつきそうなものなのに。

「じゃ、教科書十ページから。魔法の初歩の初歩。この世界には魔力があり、その魔力は個人個人にもあります。その個人個人の魔力と、世界に満ちる魔力。これらを合わせて使うのが、『魔法』です。詳しい魔力粒子としては」

もし奈緒がこの世界に来たばかりだったなら、ワクワクしながらこの授業を聞いただろう。しかし、今の奈緒は『クリア』を殺した罪悪感と、『クリア』が変わっているのに何も思わないこのクラスの違和感とで、それどころではなかった。

……何、この世界。

奈緒は生前の世界が一層恋しくなった。帰りたい。あの世界に戻りたい。

死にたくなったら、生徒会長を頼ること。楽に殺してくれるはず

奈緒の頭に、一度は訝しんだ一文が蘇る。

この授業が終わったら、生徒会長のところへ行ってみようかな。また死んだら、元の世界に戻る。きっとそうだ。奈緒はそう考えた。この世界で死んだら、また転生させてくれるかも知れない。今度は、慣れ親しんだ自分の世界で。

そう思った奈緒に死に対する忌避感が消え失せていた。死ぬことが救い。奈緒がそう考えるのも、時間の問題だろう。

「では、クリアさん。早速ですが、実践していただきましょう」

「……え？」

奈緒はまた焦った。な、何を？ 答えを探るように周りを見回しても、誰も何も答えは言ってくれない。それどころか、『クリア』の活躍を期待するような視線ばかりが奈緒に向けられた。

「あ、あの」

「大丈夫です。あなたは『記憶が消された哀れなクリア』さんですもの。魔法陣は書いてあげてますし、魔力の補助もしてあげます。あとはあなたが願うだけです。『杖よ、現れる』と」

「う、うう……はい」

奈緒はおっかなびっくり、前のホワイトボードに書かれた魔法陣まで歩く。そこまでたどり着くまでに通った人は皆、『クリア』に対して並々ならぬ期待を寄せていた。なぜこんなにも期待されるのか、まるでわからなかった。

「はい、よく来ましたね。この中心に手を当てて、願うだけでいいんですよ？」

「は、はい……」

なぜ『学園一の魔法使い』にここまで初歩的なことを言うのだろう。奈緒はそれが不思議でたまらなかった。すでに彼らは奈緒が『クリア』にいることを確信して、からかうためにこんなことを言っている……そんな想像も、彼女はした。もし、失敗すれば、どうなるのだろう。そんな風に怖がりながらも、奈緒は言われるままに、大きく描かれた幾何学的な紋様の中心部分に両手のひらをあて、願う。

「杖よ、現れる……」

言葉にまでしたのは、何がなんでも成功させなければならぬと

いう思いに縛られていたからだだった。

それが功を奏したのかどうかはわからないが、紋様は赤く輝き、奈緒の手のひら周辺に収束していく。

「え、な、なにになに!？」

半径五十センチ程度にまで狭まった紋様は、輝きを増してホワイトボードから浮き上がり、奈緒の腕をくぐりながら肩まで寄ってくる。今度は大きく広がって、頭の上に紋様が浮かぶ。

「な、なに、何これ……!？」

奈緒が驚いている間にも、紋様は動き続ける。ゆっくりと奈緒の頂点から足元へと移動する。紋様は奈緒の身体に合わせて大きくなったり小さくなったり。足もとまで来ると、紋様は地面に張り付き、奈緒がいる地点から少し前まで移動して止まった。

「……な、何、これ」

そして、紋様の中心が歪んだかと思うと、そこからステッキがせり上がってきた。

「え、え？」

それは一メートル強の長いステッキで、色は鉄色、頂点には宝石のようなクリスタルが装飾としてはめ込まれていた。ステッキはせり上がり終わってもまだ上昇をやめず、頂点が奈緒の目線の高さに来たところで、浮遊したまま停止した。

「……へえ、結構簡素ね。これが今回のあなたの杖ってわけね。



さ、それを取りなさいな。これであなたも、魔法使いの仲間入り、よ」

「……」

奈緒は浮かび続ける不思議な杖に、震えながら手を近づける。これをとつたら、もう元の世界とは完全に離れ、この世界の住人になる。なぜか、そんな直感がした。

今なら、やめられる。

奈緒は迷う。ここで自分が『クリア』でないことを告白して、生徒会長をたずねる。そうすれば、元の世界に戻る。でも、ここでこの杖をとれば……もう、戻れない。この世界の住人として、第二の人生を歩まなければならぬ。自分の意思で、この世界の『魔法使い』という役職を選びとつたのだ。中途半端では終われないし、終わってはいけない。

この世界か、元の世界か。奈緒は、迷う。迷いは振りきれない。元の世界に、戻りたい。そう思う一方で、もう死にたくないといほんのわずか思う奈緒もいた。

「どうしたの？ 魔法使い、嫌？ なんでもはできないけど、大抵のことはできるわよ？ 異性を虜にしたり、世界を征服したり、異世界を旅したり」

「……」

異性や世界には全く興味が持てなかったが、最後の単語が、奈緒の迷いを振り切った。

魔法使いになって、元の世界に、帰る。

そうすれば、死ぬことなく元の世界に帰ることができる。

そう確信した奈緒は、一気に杖を握りしめた。

「  
」

その瞬間、奈緒の世界が変わった。

## 転生と、杖と

世界が変わった。奈緒はそう感じた。

杖を握りしめた瞬間から、奈緒はこの世界で生きていけると確信した。今まで感じていた罪悪感も、驚くほど綺麗に消えていく。

『……はじめまして』

それは、声が聞こえたから。奈緒の頭の中に響く声。さきほど学校に入った時に聞こえた声と、ほとんど同質の、心地いい声。

『はじめまして、名も知らぬ異世界の少女。私の名前はクリア。クリムネア・スターライト』

その声が、自分が殺したと思っていた人間の名を、名乗ったのだから。

「は、はじめまして……？」

答えてしまってから、はっとなる。この声は誰にも聞こえていないのだから、奈緒が独り言を言っていることになってしまうのだ。彼女はあわてて自身の口をふさいだ。

『大丈夫。この世界は頭の中に魔人を飼うくらい普通だから。この世界では、独り言を呟いても、誰も訝しがらないから』  
『そ、そうなの？』

それでも、彼女は頭の中で思うにとどめた。

『とにかく、授業を終わらせないと。礼を言って自分の席に戻って』

「あ、はい。ありがとうございます」

言われたとおり、奈緒は一礼をして、さつき座っていた席に戻る。

「はい、よくできました。インテリジェンスロッドを作るとは、さすがクリアさんですね。『初めて』にしては上出来ですよ」

つとめて冷静に担任は言ったが、その声はわずかに震えていた。

『彼女、なんでもないことのように言ってるけど、実は私みたいなしゃべる杖、滅多に作れないの。……まあ、あなたのは少し勝手が違うけど。ようするに、私の、違った。あなたの魔法に驚愕しているの』

そ、そうなの？

さきほどまでとは比べられないほど落ち着いて彼女は声に戻事をする。

前の教卓では担任がすでに授業を進めていた。さきほどの魔法の添削も説明もしない。さつきのは何度も行われた儀式のようだとな奈緒には感じた。何度も行って、そのせいで感動も感慨もなくなって、形骸化してしまった礼節……そんな風を感じた。

『……ま、その辺の説明は全部後回し。あなたも、今は大変でしょうから』

……あなたは、本当に『クリア』なの？

奈緒はずっと気になっていたことを聞いた。

『まあね。でも、詳しい説明は家に帰ってから。今は、この世界についての説明をするわ。魔法の説明もね』  
それは、前でしてくれてるよ？

ある程度落ち着いた奈緒は、担任が述べる魔法理論に耳を傾けていた。ほとんど話半分で、内容は頭に入っていないが。

『あんなの、私に言わせれば下の下。もっとわかりやすい説明がある。だから、私ができる。これから、あなたの教師は私。あなたの親は私。あなたの師匠は私。……わかった？』

わ、わかつ……た？

奈緒は首をかしげながらもうなずいた。心地いい声だったが、少し棘があるように感じたのだ。

『この世界は魔法と超能力が主なエネルギー。この国の名前は日本と言って、魔法・超能力教育にかけては世界一。魔法技術も世界最高水準を常にキープしてるし、私がいるので実質の世界トップ。……政治力は皆無だけど』  
どうして？

不思議な話だ、と奈緒は思った。主なエネルギー資源にかけての技術、教育が世界一で、世界トップであるのにも関わらず、政治力がない、というのはおかしい話だ。

『いい言い方をするなら職人気質。悪い言い方をするなら『魔法バカ』。ようするに、魔法と超能力の研究と教育ができたら後はなんでもいいの。……気に入らなかつたら、戦争仕掛けりゃいいだけだし』

いい加減すぎない？

『でも、本格的に政治に乗り出して、全世界から敵視されても困る』

あー。絶妙なバランスで保たれているんだ。

奈緒はこの世界にも抜けたところがあると知って、うれしかった。

『基本的に、魔法は私が使う。最初は私の指示に従って、慣れたら自分で使ってみて』

え、でも……。

『大丈夫。ずっと一緒だから』

ずっと一緒。クリアの言葉に、奈緒は救われたような気がした。自分のことを誰も知らないこの世界。ようやく、神崎 奈緒として接してくれる人間が見つかったのだ。……人ではないが。

『とりあえず、私のスペックを言っておくわ』

あ、うん……。

スペックだなんて。奈緒は悲しくなった。クリアが自分の身体を機械か何かのように扱っているように思えてならなかったからだ。

『魔法使いとしては世界トップ。超能力の方も世界で五番以内。

運動能力は高く、記憶力も高い』

す、すごい……。

『でも、そのどれもあなたは使いこなせない』

驚いた奈緒に釘をさすように、クリアが言った。

『あなたはまだこちらへ来たばかり。私のスペックだけに目がいって、有頂天になられても困る』

わ、私、有頂天になんか……。

『……まあ、いい。とにかく、魔法を使うのも、超能力を使うのも、高い運動能力を発揮するのにも、記憶力を維持するのにも何もかも慣れが必要。すぐに百パーセントの力は使えない。心しておいて』

あ、うん……。

奈緒は神妙にうなずいた。クリアの言うことはもっともだと思ったからだ。

「……と、いうことで、おさらいは終了！ 十分休憩の後、いつもの授業に戻ります」

教卓の担任がそう宣言すると、クラスメイトは短く返事をして、各々休憩に入った。隣のクラスメイトと話す者、魔法研究を始める者、グループで集まって遊ぶ者、早い昼食を摂るもの。そして。

「怯えていた割には、ずいぶんすごいのが作ってたじゃない」

そして、『クリア』に話しかける者。どこか儂い印象を持つ、転生した奈緒に一番最初に話しかけてきた人物……崇 真登香だった。

「ま、真登香ちゃん」

『……真登香』

この時の声は、どこか寂しそうだった。どこか、悲しそうだった。

『……っ。この子は崇 真登香。クリア……あなたの友達よ』  
私の、友達？

『そうよ。最初から友達がないのでは心細いでしょう？ 他の

友達は自分でみつけないな』

まるで本当に親のような口ぶりのクリアだった。

「……真登香ちゃん？ あなた、まだ演技続けるの？」

「え、あ……」

『自己紹介もしたら？』

そんな。

奈緒は戸惑った。どうしてそんなことを言うのだろう。すっかりクリアを信じ切っている奈緒は、疑問に思いながらも従った。

「わ、私、クリアじゃ、ないです」

「……へえ？」

「わ、私の、名前は……神埼……神埼、奈緒です」

もう、これでおしまいだ。奈緒は早々にあきらめ、これからどうなるかを想像し始めた。

「へえ。奈緒ちゃん、ね。ずいぶん珍しい趣向じゃない、クリア、じゃなかった、奈緒」

ところが、奈緒が想像し始めた未来はどれも外れることとなった。

「……え？」

奈緒はポカンとした。なぜ、全然別の人の名前を名乗られても、目の前にいる『クリアの友人』は何も驚かないのだろうか？



「じゃ、これからよろしくね、奈緒」

「え、あ、はい、よろしく……」

真登香はうつすら微笑みを浮かべて手を差し伸べてきた。奈緒はゆっくりとだがその手を握りつた。

「はい、これで私と奈緒はお友達。……ね？」

「あ、う、うん……」

奈緒は一つの想像をする。この世界は超能力者もたくさんいるのだろう。きっと、真登香は心を見透かす能力を持っているのだ、と。

『真登香はそんな能力持ってないわ。……本人は、欲しがってるけど』

え、じゃあなんで……。

『それも、帰ったら説明してあげる』

なんだか先送りにされているようで、釈然としない奈緒だった。

「それで、あなた魔法の知識はどれくらいあるの？ 皆無？ それとも、基本レベルなら押さえてる？ それとももしかして、全く違う魔法体系？」

「え、えっと」

『あなたの言葉答えて』

奈緒は生前オカルトに興味は全くなかった。ファンタジーモノはよく読んでいたが、それが魔法を知っていることにはならないだろう。だから、魔法知識は皆無ということになる。

「……全く、知らない」

「そう。じゃあ、私が教えてあげる」

「え？」

「私、魔法は使えないけど知識ならあるから」

なぜ、ここまで真登香が奈緒に優しいのか。その理由を奈緒が知るのもう少し先のことである。

「次は多分演習だと思うから……。魔法科、超能力科、魔法・超能力科で別れると思う」

「真登香は、超能力科……だよな？」

「そうよ。それは覚えてるのね？」

「いや、そうじゃなくて、その、さっきの、会話で……」

ああ、と真登香は得心したようにうなずいた。

「なるほど。うまいわね」

くすくすと真登香は笑った。奈緒はだんだん何を言ってもばれな  
いんじゃないかという気さえしてきた。

「とにかく、魔法のことは教えてあげられるけど……それだけ。

実習は他の人にやってもらってね」

「あ、うん。……そ、それと、真登香」

「なに？」

恐る恐る、奈緒は真登香に聞いた。自分なりの、この世界での友  
達に対するアプローチだった。

「真登香の、超能力って、何かな？」

この世界は魔法と超能力が科学の代わりに成している世界なのだ。超能力を聞くというのは得意な教科は何かを聞く……そのくらいの意味だろうと奈緒は推理した。

「私の能力？ 『暴力』よ」

「ば、暴力？」

「……私、能力の説明はしたくないの。……せつかくインテリジエンスロッド持つてるんだし、聞いてみたら？」

真登香は奈緒の手にある杖を見ていった。奈緒は言われたまま、クリアに聞く。

暴力って、何？

『それは真登香が勝手に呼んでいるだけで、正体はただの身体能力を底上げするだけの能力』

え？

『……といっても、真登香の場合この街を拳一発で割るぐらいの力が出るから、ただのっていい方には語弊があるけど』

そ、そんな……。

『ちなみにこの世界で自分の能力を言うつてことは、そのまま自慢みたいに聞こえるから。特に、真登香や私レベルになると特にね』

「何かわかった？」

にっこり笑って、真登香は奈緒に聞いた。

『言っただけでもいいわよ。他人に言われるのなら、別に自慢じゃないし』

「そ、その、すごく力を強くできる能力……だそうで」

「……ま、だいたいあってる」

ちよつと不満げな顔で、真登香はうなずいた。

『それから……』

頼まれてもいないのに、クリアは真登香の説明に注釈を付ける。その口ぶりは大切な友達を自慢するかのような口調だった。

『真登香の能力は、戦闘最強。本気を出した真登香には、多分、魔法使いでも勝てない』

そ、そんなに!?

ただ力を強くするだけの能力なのに、と奈緒は思った。

『そう。真登香の力は戦闘にうってつけの能力。魔法を唱える速度より早く近づいて、地を割るほどの膂力で敵を倒す。ついたあだ名が……』

「あら、どうしたの、奈緒？ その杖に何か言われた？ 驚いたような顔しちゃって」

奈緒は怯えない。真登香が自分に危害を加えるような人間ではないことを、理解しているからだ。けれど、驚きはする。こんな、へたすれば『クリア』よりも線の細い女の子が、戦闘で最強。奈緒はいまさらながらに、生前の世界での常識が通用しないことを実感させられた。

『ついたあだ名が、『鬼神』。ちなみに私は『知神』。あなたはなんて呼ばれるんでしょうね？』

そんな偉そうなあだ名で呼ばれたくない。ごく普通の少女だった奈緒は、こめかみに汗を流しながらそう思った。



## 転生する前のこと

「い、いえ……その、ものすごいあだ名があるって……聞いたの  
で」

「そう。ちなみに、あなたの、じゃなかった、クリアのあだ名は  
『知神』よ」

「……それも、教えてくれました」

奈緒は真登香と話しながら、不思議な感覚を味わっていた。何も  
知らないはずの真登香と、全てを知っているクリア。両者の認識の  
差は天と地ほどかけ離れているはずなのに、奈緒に接する態度はほ  
とんど同じだった。それが彼女には不思議だった。

「そう。優秀なインテリジェンススロッドね。……本当に、杖がし  
ゃべってるのかしらね、くすくす……」

「……？」

言われている意味がわからず呆けていると、真登香は意外そうに  
目を見張った。

「へえ。今の鎌かけだったんだけど……引つかからなかったわね。  
日に日に演技が……って、これ言われるの、嫌だったね、そう言え  
ば」

ますます、奈緒は言われている意味がわからなかった。ここまで  
くると、不思議を通り越して不気味にすら思えてくる。

「……その、次の移動は……どこへ行けば」

『結構大胆に聞くのね。今までの会話の流れぶった切るなんて。』

そうそうできることじゃないわ。……よほど、真登香と話するのが嫌なのかしら?」

そういうわけじゃないよ。

『じゃあ、どういうわけ?』

……みんな、もう移動を始めてるから。

奈緒は教室の入り口へと目を向けた。彼女の視線の先では、何人かの生徒が級友たちと歓談しながら教室の外へと移動している最中だった。

「次の移動? ……えっと、確か魔法・超能力科は第二戦闘室だったかな?」

「第二……戦闘?」

奈緒は呆けた様子で言った。

「ええ。戦闘するための部屋だけ……今は、計器だらけで戦闘も何もないけどね」

「え? それじゃあどうしてそんな名前に……」

その疑問は、二人が同時に答えてくれた。

「まあ、歴史って奴よ」

『昔は生徒同士の模擬戦室だったんだけどね、十年前に生徒同士が本気で殺し合いして、それから模擬戦は中止になったの。今は、魔力測定器とか、超能力判定器とか、そんな愚にもつかないようながらくたで溢れてるわ』

そんな言い方……

『事実を事実として言って何が悪いの』

あまりにきつぱりとした言い方に、奈緒はそれ以上言うのをためらった。これ以上話せば、あまり悪口は言わないでおこう、なんていう奈緒の価値観さえも切り捨てられそうだったからだ。

「歴史……ですか。悲しいですね」

「そうね。ま、すぐなれるわ。すでになれてるかもしれないけど。じゃあね、奈緒さん」

「はい」

奈緒はうなずくと、立ち上がった。そろそろ教室を出て行く生徒達の後ろに頼りない足取りでついて行く。

「不安だなあ……」

『すぐ慣れる。大丈夫だから。それに、いやだったら生徒会長のところへ行けばいい』

奈緒は朝に読んだ小冊子の一文を思い出していた。確かに、その人を頼ればこの世界から出ることができるかもしれない。でもそれは、ひどく残酷で、最悪な方法にしか思えないはずなのだ。少なくとも、元の奈緒にとっては。

「……」

だからこそ奈緒は、そんな方法を簡単に推奨してくるクリアに、そしてそれを忌避できない自分に疑念を抱かずにはおれなかった。

私、どうしちゃったのかな……

自分の胸に手を当ててみる。トクン、トクンとかわいらしく脈を打つ自分の胸。自分のものではない。元の自分は、もういない。元



のからだは、もう亡くなった。

「……………あれ」

ふと、奈緒は疑問に思う。自分のからだは、どうしたのだったか、と。なんで自分は死んでしまったのだろうか、と。忘れたのか、覚えていないのか。

『ちよつと、奈緒』

え？

いきなりクリアに呼ばれて、奈緒ははっとなる。

ど、どうしたの？

『どうしたもこうしたも、意識半分トびかけてた。何かあった？』  
うっん、なんにも……………ないと思う。

『……………嘘はいけない』

うそじゃないよ。

『……………そう』

無関心なクリアの心が、今の奈緒には心地よかった。なぜか、クリアに聞かれたとき、奈緒の頭はほう、と霞んだのだ。まるで、世界が離れていくような、そんな感覚だった。その原因を、奈緒は推測することができなかった。

「……………」

大事なことなら思い出さだろう、そう思って、奈緒は級友のあとに続く。

リノリウムの廊下に、生徒たちの話し声と、足音が響く。幸せそ

うに歓談する級友たち。頬を赤らめて睦みあう恋人同士。その輪に、奈緒は加わることができない。ほんの最近まで、彼女には級友も、片思いの恋人もいたのだ。

……だが……。

「みんな……」

小さく、かすれるような声でつぶやく。ワイワイとやかましいくらいにおしゃべりに花を咲かせている級友たちが、その今にも消え入りそうな言葉を聞きとれるはずがなかった。

『どうしたの?』

……みんなのこと、思い出しちゃって。

『何かあったの?』

それは……

何かあったか、思い出そうとする。しかし、奈緒の頭は呆けたように霞がかって、通常の働きをしない。

『……わかった。何も聞かない。だから、落ち着いて  
うん、わかった。』

クリアのその言葉を契機にしたかのように、奈緒の頭は晴れていく。しばらくすると、頭に霞がかかっていたことさえ、彼女は忘れてしまった。

じゃ、いごうか。

『ええ』

何かある。そうクリアは見当をつけたが、詳しいことは何一つわ

からず……結局は、奈緒自身の口から話してもらっほかないと思っ  
たのだった。

## 転生する前の記憶

国立魔法・超能力学園の主だった特殊教室の中に、『魔法能力戦闘訓練室』 通称『戦闘室』と呼ばれる という部屋がある。

魔力の計測器や雑多な模擬装置などが立ち並ぶ、今や名ばかりの教室。ここで奈緒は初めての実技授業を受けることとなった。教鞭をとる先生を中心に、奈緒のクラスメイト達は円になって座っている。

「えー、では、まずは魔力の根源を調べましょう。どうやったら調べられるか、わかるかな？ えっと、三笠君！」

先生が一人の男子生徒を指定した。指された生徒は、当たり前のように奈緒のほうにちらりと視線を向け、答える。

「えっと……前世の因果と今世の因果が、魔力の根源です」

「その通り！ ちなみに私の前世の因果は『闇』『恋』『炎』で、今世の因果が『悪』『説』『恋』『炎』です」

奈緒はその説明を聞いても、まるで理解ができなかった。

『因果、っていうのは運命のようなもの。過去、現在、未来、すべてを通して象徴することのできるあらゆるじのようなもの。先生なら、前世は『暗いけど、燃え上がるような恋をした』っていう意味』

当然のように、クリアが解説をしてくれる。それでも、奈緒には噛み砕いてしか理解できなかった。

占いみたいなもの……？

『占い、っていうのが何かは知らない。正直なところ、因果の理

解はまだ先でいい。今は、因果を知る必要がある』

「どうやって知るの？」

『それを今からやる』

クリアがそう奈緒の頭でささやくとほぼ同時、先生がみんなに号令を出した。

「では、みなさん。因果魔法を使って、自分の因果を調べてください」

その号令で、奈緒のクラスメイトは一斉に目を閉じる。すると、彼らの体はまばゆい光を放った。

『私の指示通り、言葉を心に思っ。そうすれば、あなたの因果を知れる。前世の因果が。今世の因果は、私が肩代わりするから』  
わ、わかった。

奈緒はうなずくと、目を閉じて奈緒の言葉に耳をすませる。心に直接響いているので実際には、そんな必要はないのだが。

『我因果をつかさどるもの』  
われ、いんがをつかさどるもの

『因果を知り、魔の力、その根源を知るものなり』

いんがをしり、まのちから、そのこんげんをしるものなり

『根源を、今、古き記憶とともに……』

こんげんを、いま、ふるききおくとともに……

奈緒は、自分の意識が遠くのなるのを感じた。

奈緒が住んでいた町が、奈緒の視界いっぱい広がる。

「……」

視界は奈緒の意思とは無関係に動き、移動する。最初は鳥瞰図のような街の風景が次第にミクロな視線になり、最終的には人の……もつと言え、奈緒の視線の高さで止まった。視界が右を向く。そこには、奈緒が十六年間過ごした家があった。

『あなたの両親は早くに他界し、あなたは両親の今わの際の言葉を守り続けて生活していた……』

奈緒の心で、奈緒の声が響く。

『あなたは嘘をつくことを良しとせず、だれよりも『誠実』であるとした……』

『あなたの最初の因果は、『誠実』』

また、声が響く。ここでようやく、奈緒は因果を知ることとはどういうことか理解した。

自分の人生を司る『モノ』。それが、因果。そう奈緒には感じた。

『二つ目の因果……』

視界は日常の風景を映し出す。奈緒と、友人と、そして片思いの恋人とが仲良く帰宅しているシーンだ。奈緒は笑い、友人と話して

いる。友人もほほえみを絶やすことはない。恋人も、奈緒にやさしく話しかけている。奈緒は恋人に話しかけられるたび、胸が高鳴るのを感じていた。

『あなたは『やさしい時間』を過ごしていた。時の流れはなだらかで、このまま時間が止まればよいと思っていた……』

『あなたの二つ目の因果は、『時』』

視界は、突如として暗くなる。ここはどこかわからない。ただ真っ暗だ。何も見えない。たが……奈緒は、得体の知れぬ恐怖を感じていた。

『あなたは突如として不幸に見舞われた。知りたくない記憶。思い出したくもない『苦痛』。それらすべては、未だあなたの中にある……』

『あなたの最後の因果は、『苦痛』』

その声を最後に、奈緒の意識は今世に戻った。

「……………」

奈緒は目を薄く開けた。視界が少しにじんでいる。友達や片思いの恋人に会えたからだろうか。たとえ、記憶の中のことでも、たとえ、声は聞こえなくとも。それでも、奈緒は嬉しかった。胸の前で

手を祈るように組むと、記憶を慈しむように反芻する。

『あなたの今世の因果は『万能』『終焉』『幸福』『転化』。今世の記憶を、あなたが見ることはできないみたい。逆に、前世の因果を私が見ることはできない』

……クリア。

頭に響く声を聞いて、奈緒は自分が転生したことを再確認した。自分は死んで、生き返った。その認識は奈緒の心に重いものとなっている。そんな中、前世の……つまり、昨日までのことを思い出したのだ。辛くなるのも仕方ないだろう。

『大丈夫？』

大丈夫。だから、魔力の根源って、知って何か意味あるのか教えて。

つらい気持ちを押しつけて、奈緒はクリアに聞いた。今はとにかく、なんでもいいから話をしてほしかった。死ぬ前のことを、思い出す前に。

『……わかった』

クリアは身を切るような奈緒の気持ちを感じとり、話を始める。時を同じくして、前にいる先生が根源についての説明を始めるが、奈緒はそれを聞き流した。

『根源は、魔力のもとになる『性質』のこと。根源によって、魔法の性質が変わる。あなたの場合なら、『誠実』『時』『苦痛』『万能』『終焉』『幸福』『転化』。どんな魔法が使えるかは、あなたの實力によって変わる』



……ふうん。

『生まれつき攻撃魔法が使えない魔法使いや、支援魔法が使えない魔法使いがいるのは、このせい。あなたの場合は、どんな魔法でも使える。あなたは、運がいい』

……そう。

運がいいなら、なぜ私はここにいるのだろう、と奈緒は思った。

運がよければこんなところに私はいない。本当に運がよければ今でも私は普通の女子高生やってるはずなんだ。……それなのに。

クリアは奈緒の中に黒いものがたまるのを感じた。

## 転生後の転機

気持ちが悪く落ち込んだ奈緒の耳に、先生の声が届いた。

「はい、では今日はこれから外に出て魔法の演習を行います。後ろの人から移動をはじめてくださいね！」

先生に言われた通り、生徒たちはそろそろと移動を開始する。仲良くおしゃべりをしながら楽しそうに歩く生徒たちを、奈緒は羨ましそうに見ていた。

「……」

奈緒は立ち上がり、だれとも会話せずに生徒たちの波についていく。喧騒の中、奈緒だけが暗い雰囲気をもとっていた。だれも、奈緒の様子を気にも留めない。それはそうだろう、と奈緒は思う。だれがこんな暗い人間に話しかけようとするものか。自分がこんな人間を見たとしても、気にも留めやしない。もしかしたら、いじめようとさえするかもしれない。奈緒は自分にこんな暗い感情があったことに、少しだけ驚く。転生してから、奈緒は自分の心に異常を感じていた。自分が死を忌避できないことや、こんなにも暗い考えを持つことが、信じられなかった。もう自分は生き返るまでの自分には戻れないのでは。そんな考えが頭をよぎる。

『奈緒、大丈夫？』

あまりにも心配になったクリアは、奈緒に聞いた。

大丈夫。大丈夫だから。

『……そこ』

強がっているのはわかっていたが、クリアはそれ以上を聞くのをやめた。

生徒の波に流されて、奈緒は校庭へとたどり着くことができた。

「はい、みなさん。整列してください！ 二列縦隊でお願いしますね」

生徒の一番後ろにいた先生が、奈緒と同じような杖を持って生徒たちから見えやすい場所に立った。

「では、軽く魔法を使ってみましょう。広い校庭を効率よく使って、たくさん練習してくださいね。今日は……そうですね、攻撃魔法を使う人は私が出すのを、支援魔法を使う人は近くの人にかけてください。では、はじめ！」

先生が杖をふるうと、生徒たちの周りや校庭のいくつかの場所に赤い丸がついた板が現れる。それを契機に、生徒たちは思い思いに散り、魔法を使っていく。燃えたり、光ったり、爆発したり、溶けたり。奈緒はその光景を恐ろしいと思った。もし、あれが人だったなら、どうなってしまうのだろうか。そんな想像をしてみた。

「どうしたの、クリアさん」

「……先生」

一人魔法も使わずに沈んでいる奈緒に、先生がその顔を覗き込んだ。

「あなた、魔法は得意でしょ？ それとも、今日は使えない理由

でもあるのかしら？」

「……魔法が、怖いです」

奈緒は嘘をつきたくなかった。使えないものを使えると言ったり、理由があるのにないと言うのも嫌だった。だから、言い出すのに勇気は必要だったが、嘘をつかずに言えた。

「……あなたほどの魔法が使えたら、怖くもなるでしょうね。でも、大丈夫よ。魔法はあなたを裏切らない。あなたの思い通り、あなたの考えた通り発動するわ。だから、安心して？」

「……」

先生の慰めの言葉が嬉しかった。だからこそ、奈緒はさびしく思ったのだ。この言葉は自分に……奈緒に向けられたものではなく、クリアに向けられたものなのだ。そう痛感したからだ。

「私は……」

私は、クリムネア・スターライトではありません。神崎 奈緒っていう、どこにでもいる高校生です。私がクリアを殺して、乗っ取りました。

自殺する時のような心境で、奈緒はそう切り出そうとした。

……しかし。

「？」

親身に話を聞こうとしてくれた先生が、急に不審な表情になって、奈緒がいるのとは反対側にある校門のほうを見た。それと同時に、奈緒の頭にも言葉が響く。朝、彼女が学校に入るときに聞い

た、鈴のようなきれいな声だった。

『侵入者、侵入者。魔法使いではなく、一般人。魔法使用は控えるように』

その言葉を聞いて、奈緒は先生と同じ方向を見た。

そこには、集団がいた。奈緒がいた世界にはかなり普及している、『銃』という兵器で武装した、五十人ぐらいの集団。急な襲来と、おかしなものを携えた一般人の集団に、生徒はもちろん、先生も何をすればいいのかわからなかった。

「……あれは」

『何？ あんなもので何をしようとしているの？』

あれはグロックだ。奈緒はなぜか、集団のうちの一人が持っている拳銃の一つを異様なまでに注視する。

『ぐるつく？ 何それ？』

銃だよ。知らない？

『知らない。何するものなの？』

それは……

その続きを言おうとしたとき、集団のうちの一人が動いた。

「我々は貴様ら魔法使いに殺された家族の仇討に来た！ すべての魔法使いに復讐する、それが我々の悲願である！ その手始めとして、この学園の生徒、教師を皆殺しにする！」

そんな呪詛とともに、近くにいた生徒の一人に銃を向け。

「やだっ!」

奈緒は引き金が引かれるその一瞬を、目を閉じたため見ずに済んだ。おもちゃのような乾いた銃声がし、生徒の頭から、大量の血液が流れ出る。

「……なっ」

生徒たちは大声をあげながら逃げたが、先生は違った。怒りに燃えた表情で杖を構え、目を閉じ、呪文を唱える。

「『炎』よ、『闇』よ、私の中の『悪意』よ! 貫く『炎』塊となり、我が愛する者たちの敵を貫き、焼き殺せ! 行け、『フレアランス』!」

先生が魔法の名前を叫ぶと、炎の槍が生徒を撃った人間に向かって飛んで行った。彼はその魔法の槍を避けようとせず、防ごうともせず食らった。

「え?」

まさかそのまま食らうとは思っていなかったのか、先生はそんな声を上げた。炎の槍を食らった彼は、悲鳴ひとつあげずに一瞬で炭化した。ぶすぶすという音と、肉のこげる嫌な匂いが、あたりに立ち込める。

「おおおおお! 俺らも続け!」

叫び声とともに、武装した集団は逃げる生徒に向かって銃を乱射する。その光景は、まるで狩りのようだった。

『な、なんなのこいつら……！ 奈緒、逃げて！』

クリアでもこの事態は対処できないようで、そう言うことしかできなかった。

「……」

奈緒はクリアにせかされても身動き一つできなかった。拳銃を向けられるたびに全身が硬直し、発砲音を聞くたびにたとえようもない恐怖が彼女を包んだ。

『どうしたの！？』

か、体がうごかない……。

体だけでなく、頭もほとんど動いてなかった。さっきからしきりに頭に響く銃声と、霞む視界。そして、かすみがあった記憶。

「クリアさん、逃げて！ 私がここで持ちこたえるからっ！」

先生は魔法で応戦しながら、後ろにいる奈緒に叫んだ。奈緒に向かう銃弾を防ぎながら、殺さないように注意して、急いで魔法を撃つ。それでも、撃てるのは五秒に一回程度。

最初の銃声がしてから、まだ三十秒も立っていない。それなのにもかかわらず、逃げるために走った生徒の多くは撃たれ、倒れていた。死んだ者も多数いるかもしれない。その反対に武装した集団には、先生が倒した人間以外に人的被害は全く見られなかった。普段は魔法を使って超常の力をもてあそんでいるような生徒たちだが、亜音速で飛んでくる死に対しては強くなかった。

「何してるの！ 早く逃げて！」

「せ、先生……！ か、からだか……」

そう聞いた先生は、銃弾から奈緒をかばいながら、呪文を唱える。

「愛よ、『恋』よ、我が生徒よ！ 教師である我が『説』く！

我が言葉に従い、逃げよ！ 遠く果てまで逃げて、自らを守れ！」

魔法で何とか心を持ちなおそうとした先生だったが、効果はなかった。もはや奈緒の硬直は心の問題だけでなく、身体の問題でもあるのだ。

「……！」

先生は何を見たのか、急に奈緒のほうを向き、彼女を抱きしめ、そのまま押し倒す。

「……大丈夫よ、クリア。だから、逃げて」

奈緒が見たのは、悲痛な先生の表情。奈緒しか守れず、迫る集団を退けることもできず、ただ逃げろとしか言えなかった、教師の表情だった。

「……先生」

その直後、先生の背後で光がきらめき、爆発が二人を包んだ。



## 転生前の記憶

「……………」

奈緒は薄く目を開け、かすかに息を吐く。硝煙と血のにおいが鼻をつき、奈緒は顔をしかめた。空には憎たらしいほどすがすがしい青空が広がっているというのに、自分がいる地上はずいぶんと薄汚れている。そう感じた。奈緒は普段よりも重力を感じ、首だけを動かして自分の体を見る。奈緒の体の上には、先生がうつぶせに倒れていた。

「せ、先生……………」

とりあえず先生をどかさうとした奈緒だったが、まず手が重みで動かなかった。

「せ、先生……………」

先生を呼んでも、彼女は身動き一つしなかった。奈緒は何とか身をよじり、少しずつ少しずつ動いていく。

「ふう……………。先生、大丈夫ですか？」

ようやく自由になった奈緒は、手でうつぶせの先生を揺さぶる。なんどゆすつても、先生は息ひとつ吐かない。まさか。不安が奈緒の中に生まれた。

『……………奈緒、起きたの。もう二度と目覚めないかと思った』  
クリア。先生が起きないの。

奈緒は必死に先生を起こそうとする。けれど、先生は動かない。

『……奈緒、見てわからない？』

何が？

『……その人、下半身吹き飛んでる。どうみても……死んでる』  
そんなわけないよ。

奈緒は心の中で何度も思った。下半身が吹き飛んで、臓物の一部がはみ出していて、たくさんの血が出ているけど、奈緒は先生が死んでいるとは思えなかった。

『……生きていると思える？』

思えないよ。でも、魔法使いでしょ？ 私のことを守ってくれて、悪い人を倒せたんだよ？ それなのに、すごい魔法使いなのに、死ぬわけないよ。

『死なない魔法使いもいる。でも、この人はそんな魔法を使えない。だから……』

だからって、こんな簡単に死ぬなんて……

『人は死ぬ』

知ってるよっ！

奈緒はたまらず頭を抱えた。知っている。そんなこと、わざわざクリアに言われなくても知っている。自分は死んだ。だから、ここにいる。

『とにかく、今奴らはいない。だから、今のうちに逃げて……』

やだっ。

『いい子だから。逃げて。魔法もろくに使えない今じゃ、何もできないう』

わかってる！ でも、みんな死んで、先生も死んで、そんな中で、私だけが生きるなんて……。

奈緒はそう思いながら周りをみた。ついさっきまではごく普通の校庭だった場所は、今では死体ばかりが転がって、血と砂がまじりあった黒い砂利が大半を占める、地獄絵図となっていた。奈緒はぼやけた頭で思う。もうすぐ、自分自身もこの絵の一部になるのだ。そんな気がしてならなかった。

「やっとこの辺終わりましたね、ボス」

「おうよ。今度は校舎の連中片付けるぞ」

ぞろぞろと、奈緒の後ろから声が聞こえた。はっとなって振り返ると、かなりの遠くに武装した集団が奈緒のほうへと歩いていた。

「……ボス、まだ生き残りがいますぜ」

「そうか」

迷彩服姿の彼らは、物珍しそうに奈緒に近寄り、彼女を囲むと、何十もの拳銃を突きつけた。それだけで、彼女の全身は硬直し、思考が鈍くなる。

「魔法使いか？」

「杖持ってますよ」

「……だな。ウチの娘に似てるが……魔法使いなら、仕方ない」

引き金に、手がかかる。

『奈緒、戦って！』

……けん、じゅっ……

今奈緒の視界には、黒光りする銃口しか映っていない。そこから銃弾が吐き出され、奈緒の頭を吹き飛ばす光景を彼女が幻視した瞬間　時間が止まったように感じた。すべてがスローモーションになっているように感じた。そして、その時を契機に。

奈緒は、全てを思い出した。

「……！」

痛みと、苦しみ。戯れの延長で地獄を味わせられたことを。死ぬ瞬間の恐怖。そして、殺される瞬間の、『死にたくない』という強い思いを。

そして、なぜ自分が拳銃の名前を憶えていたのか。

男が趣味で奈緒をいたぶっていた際、ことあるごとにそれをちらつかせ、奈緒を怯えさせていた。彼は聞かれてもいないのに、嬉しそうにその銃の名前と入手先を語ったのだった。

「……嫌だ」

全てを思い出して、奈緒は心が壊れそうになった。感情が散り散りになって、もう戻らないように感じた。死ぬという恐怖があった。殺されるという怯えがあった。そして、それよりも、強く、強く、奈緒は思った。

死にたくない。

奈緒は何度も思う。殺されたくない。何にも成らず、何も為さずに死ぬのは嫌だ。せつかく生きてきたのに。せつかく生まれ変わったのに。せつかく自分を保ったまま、クリアを乗っ取ってまで生き

返ったのに。なのに、こんなところで死にたくない！

強い思いは、知らずのうちに力を持つ。

しかし……もうすべてが遅かった。もし、奈緒がそれを思うのがもう少し早ければ、クリアが魔法を構成し、身を守れたかもしれない。事実、もうクリアは魔法の構成を行っている。

でも、この魔法が発動するころには、すでに弾丸は放たれ、奈緒の頭蓋に穴をうがっている。……そう気づいたとき、クリアはあきらめてしまった。

奈緒はそのクリアの気持ちを感じた。奈緒の心の一部で、諦観が生まれる。けれど、奈緒は思うことをあきらめなかった。未だ圧縮された時の中にいる奈緒は、心の中で叫んだ。

死にたくない、助けて、だれか　！

「クリアッ！　今助ける！」

救いの手は、差しのべられた。奈緒に拳銃を向けていた男の一人が、奈緒の視界から消える。誰かに蹴り飛ばされて、吹き飛んだのだ。蹴られた男は二、三十メートル宙を舞ったあと、何度か跳ね、鈍い音を幾度かさせてから止まった。

それをしたのが奈緒と同じくらい、いや、奈緒以上に華奢な少女がやったのだというから、男たちは騒然である。

「な、なんだこいつ……！」

「私の名前は崇。　崇　真登香。『鬼神』の崇。知らないとは言わせないわよ？」

名乗った瞬間、男たちの間にざわめきが広がる。

「ふざ、ふざけんな！　お前が、お前がそんなわけないだろうが

！ お前が『鬼神』なわけが……」

うろたえる男をしり目に、奈緒は自分の心の声を聴く。クリアの澄んだようなきれいな声を。

『我は守護者。我は『万能』の守り手なり。知よ、力となりて『苦痛』を払いたまえ。』時』よ、癒しとなりて『終焉』を防ぎたまえ！ 発動するは最強の盾……『イージス』！』

一瞬まばゆく光が奈緒と真登香を包む。奈緒は、これは防御の魔法だということが簡単に理解できた。つくづく、クリアの頭のよさに助けられてる奈緒だった。

「私は鬼神、祟 真登香。私の友達にかすり傷一つつけさせはしない！」

一瞬で動き、次々に男たちを彼方へと吹き飛ばす。銃弾を避けようとせせず、魔法で硬化した身体で受けて一直線に敵へ向かう。思い切り振りかぶり、必殺の一撃で敵を屠る。その姿はまさしく鬼神だった。

「すごい……」

魔法に守られながら、真登香に護られながら、奈緒は感心していた。すべての恐怖を、死を吹き飛ばすのではないかと思えるほどの圧倒的な力。自分があれほど恐れていた拳銃を意にも介さず、自分があるほど怯えていた男たちをいともたやすく吹き飛ばしている。

なれるだろうか、あんなふうには。

奈緒はちらりと、そう思った。

「……大丈夫、奈緒？」

全ての敵を沈黙させたあと、真登香は駆け寄ってきて、やさしく奈緒に話しかけた。

「うん。……でも、先生が、私のせいで……」

奈緒は視線を落とした。無残な姿になった先生が、そこには横たわっていた。

「あなたのせいじゃないわ。悪いのは全部、そこらに転がっている男たち。……今ならやれるよ。復讐してくる？ 道具も貸すよ？」

「い、いいよ、そんな……」

奈緒は力なく首を振った。彼女は殺されるのも嫌だが、殺すのも嫌なのだ。

「そう。でも、今回は本当に危なかったわよ。演技なんてしてる場合じゃないの、わかってるでしょ？」

「え？」

「……まあ、いいけど。じゃ、軽く話聞くからそこらへんにいるの何人が攫ってきて」

「え？」

奈緒は何を言われているのか全く理解できなかった。対する真登香は、気絶した男たちを何人が担ぎながら、奈緒に言った。

「いや、だから、話聞かなきゃいけないでしょ？ 道具も必要ね。奈緒、あなたの家に道具あったっけ？」

「な、なんのこと……」

ひゅ、と真登香から何か投げられた。奈緒はそれをキャッチすると、それをよく観察する。

「こんな道具。いっぱいあるでしょ？」

「……！」

奈緒は全身が凍りついたように動かなくなった。奈緒の手にあるそれは、自身も一度使われたことのある『道具』。

「ま、真登香！　こんなのも……！」

それは、爪を剥ぐための道具だった。奈緒はそれを遠くに投げ捨てると、真登香に詰め寄った。

「こんなのもって、何？」

「こんなのだめだよ！　これ、すごく痛いんだよ！？」

「わかってるわ。だから効果あるんじゃない」

「効果って、なんの……」

「拷問。やるしかないでしょ。私だって嫌だけど、ここまでやられたんなら、やるしかないでしょ」

真登香は破壊された校庭を見た。先生の遺体だけでなく、たくさん生徒の遺体が転がっている。何のためにここに来たのか、武器はどうやって調達したのか仲間はいるのか。

それらを聞き出すためにも、彼らに話を聞くことは絶対に必要なのだ。

「……でも」



奈緒は、それでも嫌だった。自分が受けた苦しみを、だれかが受ける。そんなのは、絶対に。

「……はあ。わかった。じゃあ、明日。明日までにインテリジェンスロッドと話して、覚悟決めてきて。明日までは、私もこいつら縛っただけで我慢しとくから」

「我慢って……」

奈緒は思わず顔をしかめたが、真登香はそれ以上に強い憎悪を男たちに向けていた。

「こいつらは私の学園を壊したの。顔も名前も知らない先生と生徒だけど、おんなじ学校に通う学生。その人たちを殺されて、復讐したくないわけじゃない。……もし奈緒が明日もうだうだ言っているんなら、私が一人でやる。……それじゃ」

そういつて踵を返すと、真登香はどこかへ向かっていく。

あとには、呆然と立ち尽くす奈緒と、杖に宿ったクリアだけが残された。

## 転生の根源

「……ただいま」

先生を亡くしたショックと、真登香に迫られた選択とを考え続け、とぼとぼと家に帰ってきた奈緒。彼女は、まっすぐ寝室に戻ってベッドに倒れこんだ。真っ白な天井を見上げて、自分の物ではない白い腕で目を覆って、心の中でクリアに呼びかける。

教えてくれるんだっただよね。あなたのこと、魔法のこと、全部

『教える。けど、真登香のことは考えなくてもいいの？』

あとで。……嫌だよ。なんであんなことをしなきゃいけないの？あんなに痛くて苦しいことを、ほかの人にしないといけないの？

『……そう』

クリアは悲しそうにつぶやいた。まるで自分が体験してきたように言う奈緒に、転生した原因があることを悟ったからだっただ。

『……私は、生まれついで天才だった』

自慢話？

『そうとられることを覚悟して、私は話す。あなたがなぜ私の体に転生することになったのか』

……。

奈緒は黙った。早く続きを話して、という無言の催促だった。クリアはそれを感じ、あわてて続きを話し始める。

『最初に魔法を使ったのは、三歳のころ。物心ついたのも、その時。私はそれだけでなく、生まれた時から世界に流れる魔力と人に

宿る魔力を視ることができると特殊能力を持っていた。そして、その力を使って、ほとんどの魔法を使うことができた。なんの苦勞もせず』

普通の人が聞いたなら、それは自慢話に聞こえただろう。しかし、奈緒にはなぜかクリアの気持ち伝わってきた。詳しく言葉にできないほど細やかな感情の動き。それは、クリアの話が自慢話でないことを物語っていた。その気持ちをあえて言葉にするなら……もう帰ってこないとわかつている両親を、渴望するときのような、寂しさに似た感情。

『だから、四歳の時にはもう、魔法の勉強なんてするまでもなく、すべての魔法を使えるようになっていた。……だから私は……』

知りたいことは魔法で知れる。どんな魔法が使えるかは目で見える。だがどんな魔法を使うかも、目で見える。魔力を見通す目と、魔力を操る才能。その二つを同時に持つて生まれたことが、彼女の絶望の根源だった。

『私は、他人の寿命をほぼ正確に知ることができた。このことは、奈緒以外に話したことはない。……話すまでもないことだから。話しても仕方のないことだから』

自分の寿命を教えてください。そういわれるのが怖くて、クリアは自身の特殊能力を話すことをしなかった。そして、彼女の絶望の始まりは、ふとした興味だった。

『ある日、私はふと、自分の身体を見まわした。この体はどれくらいのことかできて、どれくらい生きていけるのか。それを知りたくなった。そして、見てしまった。私の、弱さを』

自分は二十歳まで生きることができない。それが、彼女の目が彼女にもたらした真実だった。二十歳までは生きることができらう。たとえ、何があっても。敵は魔法で倒せる。病気は魔法で治せる。けれど。

『私は二十歳を超える前に死ぬ。それを知ってしまった。私は膨大な魔力を有している。けれど、私には世界から魔力を供給する方法がなかったの』

そ、そんな。

『魔力は世界に無限に満ちている。人にも魔力が潤沢にある。…けれど』

けれど魔力が尽きれば、人は死ぬ。本来人は、食事や呼吸、その他的要因によって魔力を世界から供給する。しかし、クリアは例外的に、それらの手段を講じても魔力の供給ができない。それは、魔力に関して言えばほぼ完べきと言える彼女の、唯一にして致命的な欠点。

『私はその事実を知った時は、何も思わなかった。二十歳までなら、十分だと、そう思っていた。でも八歳になり、十歳になったとき、本当に恐怖した。あと十年。あと十年しか、生きることができない。魔力がなくなつて、自分は死ぬ。そう思った』

あと十年。それはクリアにとって果てしなく少ない年月だった。ほかの人はあと数十年生きることができなのに、自分だけは二十歳になることすらできない。そう彼女は思った。死なないためにたくさん努力して、遊ぶ時間のすべてを魔力供給手段を入手するために費やした。けれど、クリアはその手段を手に入れることができなかった。だから、彼女は。

『だから私は、生きることをあきらめた。死ぬことに腐心するようになった』

もう二十歳まで生きることができないなら、自分の手で自分の人生に幕を下ろす。そう決めてからのクリアは、常に自分をどう死なせるかを考えていた。

『でも、私は自分を殺すことができなかった。……痛いのも苦しいのも嫌だったし、怖かった。だから、自分の意識だけを、死なせることにした』  
『どうということ？』

『私は、自分以外の人間に私の体の権利を譲りたかった。しばらくそれを考えていたら、異世界があつて、そこには神様がいることを知った』

まったく知らないほかの世界を知ったのは、ほんの些細なことだった。ふと、暇だったから見ていたテレビ。そこで、異世界がある可能性について、論じていたのだ。それはただのきっかけに過ぎない。けれど彼女はすぐに行動に移した。

『二年分くらいの魔力を使って、私は異世界の神様と交渉して、転生するための器になることに成功した』

『せ、成功って……』

奈緒にとって、にわかには信じがたい話だった。いくら自分の死が決まっているからと言って、自ら進んで他人の器になるなんて。

『私はその契約が済んだ時から、準備を始めた』  
準備？

『つまり、ある日突然私が私じゃなくなっても大丈夫なように、周囲と私を変えていった』

それからの彼女が行った努力は、並大抵ではなかった。

『異世界に来て一人きりではさびしいだろうと、最初に理解のある友達を一人』

言わずもがな、真登香のことである。

『異世界に来てなんの知識もなしじゃつらいだろうから、自分の心を写し取ったインテリジェンスロッドを、頭の中に仕込んだ。杖召喚の魔法を使えば、現れるようにプログラムした』

その成果は、すでに奈緒の手の中にある。

『次に、周り。私はその日から定期的に全く別の人格を演じ、急に転生してきたとしても周囲が適応できるようにした』

十歳の時から、今まで五年。クリアが演じた人格はおよそ二百五十。そのおかげなのか、クリアの周囲はクリアのことを『時々性格が変わる人間』と認識していた。

『そして、昨日。五年前に契約した神様から、連絡があった。…連絡があったのは、正直言って嬉しかった。しっかり前準備できたから』

前準備？

『この世界についての簡単な注意事項をまとめた冊子と、朝ご飯。それから、新品の服と、鏡。かなり散財したけど、まだお金は残ってる。安心して』

……そんな。

自分の心が明日消えるとわかっているのに、恐れるでもなく、淡々と転生してくる者のために準備をするクリアを想像して、奈緒はショックを受けた。

『私は昨日までの私。もう成長することはなく、もう死に怯えることもない』

でも、そんなのあんまりだよ。あなたはあと五年は生きれたんだよ？

『あと三年』  
え？

奈緒は呆けたように聞き返した。

『契約の時に二年分の魔力を使ったから、あと三年。この寿命はもう、私のではない。あなたの寿命』

……そう。

奈緒は自身の寿命があと三年だと聞かされても、特に悲観はしなかった。奈緒にとって自分はすでに亡くなった命。三年命が増えただけでも、御の字だったからだ。

『あと三年しか生きることができない体で、ごめん』  
いいよ。私、本来ならもうあの世にいるんだから。

奈緒はそう思った。そう思っているはずだった。

『……今はそう思っているかもしれない。でも、最後の一年できっと、奈緒はもっと生きたいと思うようになる。……その時、奈緒

はどうする?』

わからない。わからないよ、クリア。

自分が生きるために何をするか? そんなこと、奈緒は考えたこともなかった。

『……そう。魔法のことは、もう少しだけ待って。時間をかけてゆっくり話していく。……それじゃ嫌?』

まさか。それでいいよ。……というかさ、その、魔力が見えるんだよね、クリアは。私は見えるのかな?

『見えない。それは私の能力。奈緒の力じゃない。特殊な力を持つていたのは私の魂で、その体じゃなかった。それだけの話』  
そう。

きつぱりと言われて、さびしいような、嬉しいような。

奈緒はふと思いついたようにむくりと起き上った。

『奈緒、どうしたの?』

お風呂、それと、着替えしないと。

『洗淨なら、魔法で何とかなる』

気分の問題なの。

『そう』

それだけ言うと、クリアは黙った。部屋を出て、クリアの案内のもと風呂場へ向かうと、奈緒はタンクトップとジーパンを脱ぎ、下着を脱いで全裸になった。洗面台の自身の体を見て、彼女はため息をついた。

『どうしたの?』

……なんでもない。



言えるわけがなかった。鏡を見るたびに死んだことを自覚させられる、などということは。風呂場に入ると、奈緒ははたと気づいた。

「あ」

自分は何も湯を沸かしていない。それなのに、湯船に湯が入っているわけがない。いろいろなことが起こりすぎて、判断力が鈍ったのだろうか。

「……」

今からもう一度服を着て風呂が沸くのを待つのが億劫になった奈緒は、今日はシャワーだけで済ますことを決めた。

『気分の問題じゃなかったの？』

それでも気分は晴れるよ。

負け惜しみをクリアに言い、シャワーを浴びながら、奈緒は考える。先生のこと、集団のこと。

なんで武装した人たちはあんなことをしたんだろう。奈緒はだんだん深みにはまっていく。

彼らは殺された家族の仇とかなんとか言っていたけど、それなら自分は先生の仇を討っていいのかな。実際に、真登香は仇を討とうとしているんだし。

でも、と奈緒は思う。

たとえ仇を討つにしても、苦しめるのは嫌だ。きつと、痛いことをすればあの人たちだって叫ぶ。その声を自分は聞かなきゃいけない。そんなのは嫌だ。

そうは思っても、奈緒には彼らを殺すこと自体に忌避は抱かなか

った。

なぜなら、奈緒にだって真登香の気持ちがあるからだ。殺されたなら、殺し返したいと思うのは当然のこと。彼女はそう思っていた。そして彼女自身、そう思ったことがないわけではない。幼いころ、彼女の両親は交通事故で亡くなった。奈緒はその原因となった加害者を、殺してやりたいと思ったことが幾度もあった。

その感情が醜いものだと言った奈緒自身は考えていた。しかし、それでも、切り離せずにはいられない感情だった。ただ、それを実行に移すとなれば、話は別。

実行すれば、それは闇に身を墮すということ。憎む側から憎まれる側になるということ。

「どうしよう……」

自身の胸に手を当て、もっともっと考える。

明日までに答えを真登香に伝えなきゃいけない。たった一人の友達を失わないために、どんな風に伝えればいいだろうか。それがわからなかった。友達とケンカをしたことは数あれど、それが人の生き死にに関わってくるということは、今までなかった。だからこそ、奈緒は慎重になる。

……明日、どうしよう。

シャワーを浴び終わり、パジャマに着替え、床に就いても答えは一向に見えてこなかった。

## 転生の夢

夜のとばりが完全に落ちたころ、クリアは奈緒の頭の中で思考していた。奈緒が転生してきた原因を。

『…………』

奈緒を起こさないよう、慎重に考えながら、クリアは考える。そもそも、クリアと神が交わした契約は単純だった。神がこれだと思っただけで人間の魂をクリアの体に転生させるといっただけで、その契約のすべてである。そして、その神は悪人を進んでほかの世界に転生させようとするような神ではなかった。それに加え、奈緒が時々見せる異常を加味して考えたところ、クリアはある過程を組み立てた。

奈緒は何か事件に巻き込まれて、転生する羽目になったのでは？ そう仮定すれば、時々奈緒の思考が霞むのは、その時のことを思い出していたから……。そうとらえるのは難しくない。

『…………ならば』

ならば、どうして生きようとするのだろうか。クリアは不思議に思った。自分は自分自身に悲観して、自分でもできる自殺方法を探し、そして実行した。今自分が思考しているのはクリアの残滓。そう彼女自身は認識している。

けれど、奈緒は違う。奈緒は今、ここに生きている。そして、三年後には死ぬ運命。また死ぬ恐怖と戦わなければいけない。それなのに、なぜ奈緒は生きようとするのだろうか。何か理由があるのだろうか。

クリアはそんなふうに、奈緒のことに興味を持った。

『夢へ』

奈緒の夢を盗み見てみよう。一度死んで、よみがえったこの子は、  
いったいどんな夢を見るのだろうか。

クリアはすつと、奈緒の深層意識に潜り込んでいった。

奈緒は、今自分が夢見ている光景が夢だと自覚していた。何もな  
い白い空間で、奈緒ともう一人、学生服を着た少女が話している。

「ねえ、奈緒」

「なに、由香里」

死ぬ前の奈緒の友達が、彼女の名前を呼んでいて、ほかの誰でも  
ない、奈緒を見てくれている。そんなことはもうすでに失われたと  
いうのに。

「一体いつになったら優に告白するの?」

「え、ええ? こ、告白? し、したいけど……できないよ  
「どうして?」

にっこりと、友達は微笑んでくれる。奈緒は幸せに満たされる。

ああ、相談してよかったな。そう彼女は感じた。

「だ、だって、も、もしかしたら優には彼女いるかもしれないし……」  
「いいじゃん、いても。寝取っちゃえば？」  
「そ、そんなことできないよっ！」  
「あはは、冗談冗談。てか、あいつ彼女いないよ？」  
「冗談きついよもっ……」

そういいながら、奈緒は笑っている。何も由香里は本気で寝取れと言っているわけではない。冗談だとわかってくれると信じているから、そんな冗談が言えるのだ。

「でも、さ」  
「ん？」

少し、由香里の様子が変わった。奈緒の心も、少しだけささくれだった。なぜかは、傍で見ているクリアにもわからない。

「でもさ、本当にそれだけ？」  
「え？」  
「本当に、彼女がいるかどうかわからないから、告白できないの？」  
「え？」

奈緒は戸惑う。それ以外に理由はなかったはずだ。もし彼に彼女がいて、告白してしまったら。もしかしたら彼にとっての幸せをぶち壊してしまうかもしれない。その懸念だけが、告白できない理由だったはず。

「あなた、その指で彼の手を触ろうとするの？」

「？」

ポタリ、と小さく水の音がした。奈緒は、自身の爪が剥がれ落ちていて、そこから血が流れるのを見た。

「な、こ、これは……！」

「ねえ、奈緒。そんな顔で、彼が振り向いてくれるとも思っているの？」

由香里に言われて、奈緒は自分の顔を触る。何があったのかはわからないが、顔の皮膚がはがれ、血液が染み出すように流れている。

「それにさ、あなた、そんな喉でどうやって声を出すの？」

「え？」

奈緒は自分の喉に手を当てた。そこには、紅く染まった孔が空いていて、そこから奈緒の呼吸はもちろん、出そうとする声も漏れていた。ヒューヒューと、空気を通る音がする本来ならば致命傷。けれど、ここは夢だ。何があっても、死ぬことはない。

「そんな目で、何を見るの？」

「……」

急に親友の姿が見えなくなった。見えなくなったのではなく、自分の目がえぐられたのだということを、奈緒は自覚した。

「そんな目で、どうやって返事を聞くの？」

それ以降、うつすらと聞こえていた空気の流れる音も聞こえなくなって、親友の声も途絶えた。

『そんな体で、付き合ってたなんて言いつつもり?』

奈緒の心にその言葉が響いて、奈緒はようやく理解した。

ああ、自分は今ですであの世界じゃ肉塊なんだ、と。

そして、クリアは奈緒の夢を覗き見たことを激しく後悔した。

「 由香里」

奈緒はぱちりと目を開けた。

むくりと体を起こすと、彼女は自分の体を見まわした。白い肌に、細長い指。奈緒はそれを自身と認識するのにずいぶんと時間がかかった。そしてまた再び、自分が死んだことを思い出した。

『大丈夫? うなされていたけど』

そうなの? 覚えてない。

奈緒は自分が目覚めた時に何を言ったかも忘れていた。そもそもどんな夢を見ていたかさえ、覚えていなかった。

……目覚めがいいなあ。

奈緒は心の中で思った。奈緒は生前、目覚めは悪いほうだった。それなのに、今日はさっぱりとした目覚めだった。

『これがわた、クリアのふつう。これからはあなたの普通になる』  
ふふふ、嬉しい。

奈緒はベッドから降りて、服を着替える。裾がレースになっている半袖の服に、少し短いチエック柄のスカート。下着は普通のショーツ。ブラを……つけようとして、やめた。

しなくてもいいか。というかないし。クリアはブラしたことないの？

『ある。けど、ぶかぶかだった』  
まあ……この胸じゃね。

奈緒はそう言って視線を落とした。なだらかな曲線を描いた、クリアの体。これではおそらく一番小さいサイズの物でもぶかぶかだろうということには想像に難くない。

「……ふつ。朝ご飯朝ご飯」と

服を着替え終わった奈緒は、朝ご飯を食べに部屋を出て、リビングへ。キッチンの様子は昨日の朝から全く変わっていない。

そういえばクリア、あなたの保護者は？

奈緒自身両親を失った経験があるため、『両親』という表現は避けた。



『いない。自殺した』

……。

いきなり知らされた事実には、奈緒は絶句した。

『大したことじゃない。気にせず、料理を作って』

そんなこと聞かされて動揺しない高校生なんていないよ……。

言われた通り、冷蔵庫を漁って何か食べ物がないか探す奈緒だったが、どこか上の空だった。クリアがどう話を切り出してくるのか、ひやひやしているのだろう。

『そこに肉があるから、全部食べといて』

え？　なんで？　結構量あるよ？

『もし今日真登香と会って、あなたが立ち会うことになったら、もしかしたらしばらく肉が食べられなくなるかもしれないから』

あ……。

奈緒は思い出したように真登香のことを考え始めた。

そうか……登校するまでにきめないといけないんだね。

『時間があるとは思えない。八時まであと一時間しかない。料理を作って食べて、歯を磨いて鞆を持って、靴を履きかえて。一連の動作を早くしないと』

ニュースも見たいのに……。今日休むわけにはいかないかな。

『……たぶん、真登香が押し掛けてくると思う。……昨日の首謀者たちを連れて』

つまりそれは、拷問云々をここでするつもりなのだろうか。そん

な想像をして、奈緒は青くなった。

『新聞紙を床に敷く？ そうすれば血に汚れることもないから』  
『そもそも私の前でそんなことさせないよ！』

奈緒はたまらなくなつた。なぜ人を拷問する云々を朝っぱらから考えなくてはいけないのか。頭から真登香や昨日の襲撃者たちのことを追い出すと、気を紛らわせるように料理を作り始めた。と言っても、それでも料理の項目はできるだけ肉を消費するものを考えているのだが。

……ねえ、ニュース見ていい？

『好きにすればいい。ここはもうあなたの家』

「……………」

奈緒はいったん料理を切りやめると、テレビをつけて、適当にチャンネルを変える。

『……………昨日午前十時ごろ、公立魔法・超能力総合学園に武装集団が押し入り、校庭で授業をしていた生徒、教師、合わせて五十人が死傷する事件が発生しました。武装集団は中にいた生徒に鎮圧されましたが、何名かは依然として逃走している模様で、『魔法警察』は現在も捜査を続けています。続きまして……………』

奈緒は少しだけ動きを止めた。名前も知らないのに、死んでしまった先生のことを思い出したのだ。

『奈緒。気にしちゃダメ』

先生は……………私のこと、知っていたのかな。

『それは……………わからないけど』

クリアはあり得ないとわかっていながら、その言葉を濁した。

「……あ、もうこんな時間……」

時計にふと目をやると、そろそろ八時になるつかという時間だった。ずいぶん長い間固まっていたようだ。

「ごはんは……もういいか」

奈緒はそうつぶやくと、部屋まで戻って鞆をひつつかんで玄関を出た。

『奈緒。私の体は体力ある。けど、朝食を抜いてもその力がでるかどうかはわからない』  
遅れるよりはまし。

そうクリアに返事をする、奈緒は昨日と同じように走り出した。彼女の心情は、昨日と正反対だったが。

転生した時に……

『魔法・超能力科、クリムネア・スターライトを確認』

校門に入ったところで、奈緒は昨日と同じように頭の中で声が響くを感じた。きれいに響く鈴の音のようで、彼女にとっては心地が良かった。

「おはよ、クリア」

「……おはよう、真登香。私はクリアじゃないよ。奈緒だよ」

校門を入ったすぐのところまで待ち構えていた真登香に、奈緒は鬱々と挨拶をした。

「あ、そうだったね」

「……授業は？ いかないの？」

奈緒は昨日の話題を出される前に、教室に行こうと、真登香の横を通り抜けようとした。

「今日学校休みだよ」

だが、それは真登香に止められる。

「え？」

「あんな事件あった昨日今日で学校あるわけないじゃん。たぶん一週間は学校ないよ」

「……そんな」

奈緒はがつくりと肩を落とした。今、奈緒がこの世界のことを知るには学校に通うことが必要不可欠なのだ。ニュースで得られる情報は少ないし、何よりさびしい。しかし。

奈緒は周りを見回す。青い服を着た見慣れない大人たちが学園の中をうつろつき、ところどころには黄色の、魔法でできた線が中空に浮かんでいた。彼らは警察のようなものなのだろうか、と奈緒はあたりをつける。そうか、こんな状態で授業なんてできるわけないか。奈緒はあっさりと納得した。

「奈緒がそんなに学校好きだとは知らなかったけど、まあ、あれよ。考えてきてくれた？」

「……うん」

一日経って頭も冷えたのか、奈緒に詰め寄るようなことはせず、やさしい口調で真登香は話を切り出した。

「答えは？」

「……ごめん。私、やっぱり誰にも酷いことしたくない」

「あいつらが先にやったんだよ。もしかしたら、奈緒だって死んでたかもしれないんだよ？」

「……でも」

奈緒は少しだけ想像した。もし、自分がここで言葉を翻し、彼らを拷問するといえはどのようなのだろうか。どこかに連れて行かれて縛られた彼らと、おぞましい道具が転がった場所で、延々と他者に苦痛を与えることになるのだろうか。自分がされたことを、他人にもするのだろうか。そんなくらい想像を。

「私は、生きてるよ」

「先生は死んだでしょ？」

それを言われて、奈緒には理論的な拒否の理由がなくなってしまう。感情的に、頭に思いついた言葉をそのまま言っていく。

「……私は、嫌だよ。そもそもなんで、真登香は私をそんなことに誘うの？」

「奈緒、恨みは晴らさなきゃ気が済まないって言ってたじゃん。奈緒の分はちゃんと残してるから」

「私はそんなの嫌なの！ 私は『クリア』じゃないの！ 『奈緒』！ 『神崎 奈緒』なの！ 一緒にしないで！」

カツとなって叫んだ奈緒の目には、涙がたまっていた。

「う」

言い過ぎたか、と真登香は後悔するが、奈緒は止まらない。一度切れた堰は、なかなかもとには戻らない。

「私、嫌って言ったよね！ 痛いことするのはいやだって言ったじゃない！ なんで誘うの？ なんで強制しようとするの！？ 私、あの人たちがどうなるうと別に何も思わない！ 真登香、あなたがあの人たちをぐちゃぐちゃにしたとしても、私は別に怒らないし悲しまない！ でも、私を巻き込まないで！」

最後の言葉に、真登香は反応した。

「巻き込まないで？ 巻き込まないでって何？ なんでそんなこと言われなきゃいけないの！？ あなた、ずっと前にこういうの得意だって言ってたじゃない！ それなのになんで私が悪いみたいに言うの！？」

「そもそもなんで拷問なんてしなきゃいけないの!？」

「話聞かなきゃいけないからに決まってるじゃない! ただ殺すだけじゃだめなの!」

『奈緒、よく考えて。真登香がこういった意味を』

クリアに言われて、奈緒は少しだけ疑問に思った。それがきつかけで、ふと冷静になる。

「ちよ、ちよつと待って」

「はあ!？ 何よ!」

いったん落ち着こうと、二、三度深く深呼吸をする。それが終わるころには、奈緒の頭はすっかり冷えていた。思い切って、聞いてみる。

「言い過ぎた。ごめんね。それで、聞くけど……そういうわけにもいかない? なんで?」

「……だって、ここらじゃ全く出回ってない道具使ってたんだよ? 絶対バツクにだれかいるって」

それは、ある意味美しい光景だった。ケンカしていた二人が、一言謝ればもう普段通りの会話をしている。本当のきずがあるかのように見える。これが本来のクリアと真登香なら、そう考えても全く問題はない。

しかしその実、二人はそんなもので喧嘩を切りやめたのではない。互いに生き残るために、協力するしかない、ここで喧嘩別れをするわけにはいかないと、彼女たち自身も気づかないほど深いレベルで感じ取ったのだ。それは、この事態が二人の意識の許容容量をはるかに超えた事態だということを如実に表していた。

「……暴力団とか、じゃないかな」

「何それ？」

「知らないの？」

言ってから、奈緒は思いついた。もしかしたらこの世界にはないのかもしれない。もしくは、名前が違うのかもしれない。そう思った彼女は、思いついたまま、口を開いていく。

「拳銃持ってて、乱暴で、あくどいことしてお金稼いでる人たちのこと」

「あ、クリーカーのこと？」

「く、くりーカー？」

「拳銃ってのは知らないけど、魔法使って犯罪犯してる連中は、そう呼ぶのよ。奈緒は知らなかった？」

「え、あ、うん」

奈緒は素直にうなづく。

「意外と常識抜けてるんだね、奈緒って。てっきりなんでも知ってるかと思ってた」

「わ、私そんな、なんでもなんて知らないよ」

手を振りながら否定すると、奈緒はもう一度切り出した。

「ねえ、真登香。拷問せずに話を聞けるかもしれないよ」

「どういうこと？」

『聞かせてほしい。どういうこと？』

二人に催促されたが、奈緒はまずクリアに答えた。



ほら、魔法。話を聞き出す魔法とか、あるでしょ？  
『…………あなたの因果で聞けるかどうかはわからない。でも、やってみる価値はある』

クリアの言葉を聞いて、奈緒はうなずいた。

「真登香、魔法を使えば、できるかもしれないよ？」

「…………そっか。そうだね。ついてきて。こっち」

真登香は申し訳なさそうに奈緒の手をつかむと、走り出した。速度を奈緒に合わせてくれているため、奈緒はよるめいたりつまずきそうになったりせず、その場所へたどり着くことができた。

真登香が奈緒を連れてきたのは、校舎の裏にある倉庫のような施設だった。奈緒の世界にもあったような、プレハブの倉庫。そこには木でできた表札があつて、そこには『第二戦闘課倉庫』と書かれていた。

「ここ。ここにあいつらと、道具があるから」

「どっ……………」

奈緒の記憶が一瞬煌めいて、彼女はふらつく。どんな道具かを具体的に想像してしまった自分を恨めしく思いながら、真登香に微笑む。

「大丈夫だよ、真登香。さ、いこ？」

「…………本当に大丈夫？」

真登香はそう言って倉庫に入ってしまった。

なけなしの勇気を振り絞って、奈緒はそこに入ってしまった。

## 転生の狂気

血のおいがする。

奈緒は倉庫に入って一番にそう思った。妙に鼻につくさびたような鉄くさい臭いだった。大量に流れる自分の物を嗅いだことがあるのだから、奈緒にとっては間違えようがないものだった。奈緒は、狭い通路に所せましとおかれている段ボールや、奈緒には使用途の全く分からない何かを避けながら、真登香についていく。

『何、このにおい』

血の匂いだよ。

『わかるの？』

……うん。

でも、クリアは違うようだった。なんでも知っているかのようにふるまうクリアが、奈緒の知っていることを知らない。もしその差がもっと朗らかな事柄であったのなら、奈緒はほほえみの一つでも浮かべただろう。

「奈緒、どうしたの？」

「な、なんでもないよ！ ……血のおいがするんだけど、真登香」

実を言えば、ほかにも嗅いだことがないような臭いもわずかに漂っているのだが、奈緒はそれをあえて無視した。

「……やっぱり、クリア、じゃなかった、奈緒にはわかつちゃうか。ごめんね、せつかくいい案を出してくれたのに」

そう言って、真登香は奥にある扉を開けた。

「……」

その奥にある光景を見て、奈緒は凍りついた。吐きそうになって、思わず口を押える。何とか吐き気を収めると、震える声で彼女は言う。

「ま、まどか」

「……ごめん」

そこは、壁の周りには段ボールが何段にも積み上げられ、空いているスペースは中央の空間のみ、という狭い部屋だった。そしてその唯一空いているスペースには、何をされたのか分からないが、人間かどうかも判別つかなくなったモノが四つ、転がっていた。

「み、みんな殺しちゃったの？」

「ううん。一人だけ」

真登香が肉塊の間に手を突っ込んで引つ張ると、そこから真っ赤に染まった人間がでてきた。カタカタと震え、失禁してはいるが怪我もなく、無事生きているようだった。

「……ひゃ、ば、化物……」

「黙れ」

真登香が一言いうと、その人間はあわてて、自分の手で自分の口を覆った。

「……真登香」

「ごめん、ごめんね、奈緒。私、我慢してたんだ。でもね、こいつらがうるさいから……」

そう言う真登香の表情は、身を切るような悲痛な顔だった。何を言われたのだろう。奈緒は思わず同情してしまう。

「話、聞かないと」

「うん。道具あるよ?」

真登香は首を振って、血まみれの男に歩み寄った。

魔法、お願いできる?

『不可能じゃないけど、時間はかかる』

魔法ができた時にすぐ使えるよう、奈緒は杖を男のほうに向けた。

「ひ……ち、近寄るな化物っ！魔法に取りつかれた悪魔が！

俺に近づくな！俺に何もするな狂人が！」

奈緒は真登香が怒った理由を理解した。

「……真登香」

「なに?」

「今から私、変になるから」

自分に言い聞かせるように、奈緒は言った。奈緒の中にため込まれた黒い気持ちはもはや、抑え切れるようなものではなかった。

「どういふこと?」

「私、今から変になるの。……壊れちゃってもいいかな」

「……別に、いいけど。ちゃんと普通の奈緒に戻ってきてね」  
「うん」

真登香に言われると、奈緒は少しだけ安心した。よかった。私はこれがおかしい状態なんだ。これが普通なんじゃなくて、おかしいんだ。

悪意と邪気に満ちた今の心が普通ではなく、本当の自分というわけでもないことに、奈緒は心の底から安心した。魔法のことなど頭から吹きとんだ奈緒は、冷たく聞いた。

「じゃあ、話聞くよ。口を開いて、襲撃者さん」  
「従え」

真登香に命じられて、あわてて男は従った。奈緒は一度深呼吸すると、心に言葉を思い浮かべる。

クリア

『何？』

たぶん、もう魔法はいいよ。今の私、どうかしてる。私、どうやったらかこの人から話聞けるか、もう道筋を思いついたから。いつもはこんなこと、考えないのにな。

『……恨みを持つのは人として当たり前。奈緒は、ふつうだからだから、安心していい』

……ありがと、クリア。

クリアに言われて、また奈緒は安心する。

「ねえ、あなたのお名前は？」  
「え、えっと、光。公義 光」

男の声はずいぶんと若かった。背丈もある方とは言えない。もしかしたら奈緒と同年代の可能性さえあった。

「……ねえ、光さんはいくつ？」

「25歳」

「へえ」

奈緒は冷めた目で光を見る。その眼は、視界にいる人間の存在を認めない、そんな鋭い瞳だった。

「あなたは、私たちに復讐したいんだったよね。でもさ、私、あなたに酷いことした？ 私があなたの家族を殺した？」

「い、いや」

「じゃあ、なんで先生を殺したの？ 私に酷いことするの？」

「そ、それは」

「仇討って言ったよね。じゃあ、私も仇討していいの？ ……真登香はもう仇討したみたいだし」

矢継ぎ早に次から次へと言われ、光はどんどん冷静さを失っていく。

「……どんなふうに死にたい？ どんなふうに殺されたい？」

「お、おれは」

「殺されたくない、なんて言わせないよ。おかしくなっちゃうくらいに苦しんで、痛みにあえいで、最後には壊れて死んじゃえばいいんだ……私みたいに」

奈緒はこの世界に来て初めて、他人に呪詛の言葉を吐いた。奈緒はすごく気分が悪くなった。他人を罵倒しても、他人を脅しても全然気分が晴れない。たとえ、それが……

「あ……あ……い、いやだ……」

「死にたくないの？ ……じゃあどうすればいいと思う？ どんな努力をするべきかな？」

「な、何を？」

「私は、頑張ったよ。あなたも頑張って」

たとえそれが、演技だとしても。凄味のある言い方に、光は必死に頭を働かせ、奈緒が何をしたいのかを悟った。

「お、おれは何もしゃべれない！」

「別にいいよ、それでも。私は先生の仇を討つだけだから」

奈緒は冷めた目で見つめ続けながら、光に手をかざす。特に何もするつもりはないが、光は勝手に勘違いした。

「ま、待ってくれ！ わ、わかった、全部話すから！」

「……あなたたち、あの武器をどこで調達したの？」

「い、異世界からだよ」

光の言葉に、真登香と奈緒の二人は、お互いに目を見合わせた。

「……続けて」

「俺らのうちの一人に、魔法使いが一人だけいて、復讐を手伝ってもらってたんだよ」

「魔法使いは敵じゃなかったの？」

「同じ家族だぞ！」

自分の仲間の魔法使いはよくて、ほかの魔法使いはダメ。そんな考えに、奈緒は嫌気がした。

「……それで、何を？」

「な、何をもって」

「……」

奈緒はひたすら見下ろす。その様子を見ている真登香は普通にしていたが、奈緒の中にいるクリアは戸惑っていた。奈緒はこんなにもどす黒いことを考えて、実行できる人間だったのか、と。

「わ、わかった、言う、言うから殺さないでくれ……。異世界があるってのは知ってるか？」

「……いいから、続けて」

「い、異世界から、いろいろとかっぱらってきたってそいつは言ってた。とにかくあいつは頭がよくて、おれたちにここを襲撃するようにつづったのもあいつなんだ」

奈緒は今までの話を頭の中で要約する。武器を調達したのはその魔法使い。ここを襲撃するよう指示したのも、そいつ。ならば。

「あなたたちのリーダーは、そいつね。名前は？」

「え？」

「その魔法使いの名前」

「でも」

「……真登香、可愛いそうだけど、道具とつてくれる？」

「え？ あ、うん……」

真登香は光から手を放すと、血が飛び散った荷物の中から、何やら禍々しい道具をいくつか取り出して、奈緒に渡した。受け取った奈緒は、記憶の煌めきに意識が飛びそうになる。その苦しみの次には罪悪感が心の中に満ちていく。



「……ごめんね」

「ま、待て待て待て待って待ってくれ！ わかった言う、言う！」

「あなたそればかり。嘘かもしれないし」

「この状況で嘘を言うわけないだろ！」

奈緒は曇った表情のまま首を振った。

「あなたはまだ一度も痛みや苦しみを受けていない。……そんな状況じゃ信じられないよ」

「嘘だろ！？ ちょっと待てよ、おれは嘘なんてついてない！

誓う！ だからやめてくれ！」

奈緒は初めて能動的に人を疑った。絶対に間違いがあつてはいけない。真登香と自分を守るために、絶対に。その強い気持ちで、奈緒の心を変えていた。

「あなたが、自分が死ぬかもしれないって思って、自分の命と引き換えに話した情報だけが、信じられる。今の状態じゃ、ダメ」

「ふ、ふざけないでくれ！ お、おいあなた、頼む、やめさせてくれ！」

あまりにせつぱつまったのか、光は真登香に助けを求めた。

「……奈緒、あんた今ちょっと変だよ」

「言ったじゃない、変になるって」

「そういう変じゃなくて。奈緒、今、なんかちょっと何かに取りつかれたみたい。それに、今そいつが嘘を言ってるとは思えない。

……奈緒がそういう復讐を狙っているんだったら、余計なこと言っただわね」

奈緒は真登香のほうを見て、首を振った。その顔は、光に向けているのとは違って変って、穏やかな表情だった。

「……うっん。私、復讐なんていいよ。ありがとっ、真登香。じやあ、名前を言って、光」

光のほうへと顔を向けると、また冷たい表情になる。その変化を、奈緒自身は気づいていない。

「グラウベンだ！ グラウベン・シュバルツ。そう名乗ってた！」  
「……外国人？」

奈緒は真登香に聞いた。

「どこの国の人だろ」

「さあ。どうでもいいよ。この国にいるんでしょ？」

「あ、ああ。お、おれが知ってるのはこれだけだ！ 本当だ、信じてくれ！」

「……そう」

奈緒は何も言わず、踵を返した。

「……あなたたちの本拠地は、どこにあるの？」

「こ、この町の郊外にある森の、三つ並んだコテージだ！」

「町はずれの森の三連コテージね。わかった。真登香、行こうよ」

真登香のほうを向くと、奈緒は手招きした。

「なんで？」

真登香がそれを聞くと、奈緒はぼかんとした。

「なんでって、私、普通に生活したいから。だから、いつ襲ってくるかわからないような集団は、倒すか無力化しないと、安心して夜も寝られないよ」

「……………そうね」

奈緒のさばさばした物言いに真登香は驚いたが、言っていることそのものは納得できた。

「……………こいつは？」

真登香は視線を光に移すと、手を振りかぶった。

「お、おい、あんた何を」

「好きにしたら？ 私は止めないよ」

「……………いいの？」

「私が嫌いなのは、拷問だけ」

「さつきこいつにしたのは何なのさ」

「……………尋問だよ」

道具を向けることが尋問になるのかどうかは本人にもわからなかったが、奈緒は無理やりそう納得した。

「……………奈緒なら、こいつ殺す？」

「私は、別に命まではとらなくてもいいと思う。でも、真登香がその人の家族の仇になる覚悟があるのなら、するべきだと思う」

「そう。ありがとう」

そういつと、真登香は目に殺意を宿らせた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ 助けてくれるんじゃないのか！？」

乞うように叫ぶ光に、奈緒は冷たく言った。

「言えば助けるなんて言っていない」

奈緒は自分が殺されている最中のことを思い出す。奈緒は、自分が助かるために思い出すだけで背筋が凍るような恐ろしいことを口走っていたのを思い出した。それこそ、たとえ命は助かってもその先、生き地獄になるようなすさまじいことを。そんなことをかけらも口に出さず、ただ情報を話しただけで助かるうと思っっている光のことを、彼女は許すことはできなかった。

……やっぱり、今の私変だ。

『大丈夫。大丈夫だから』

クリアは思わずそう言って、奈緒を慰めた。

「待てよ！ それじゃ俺何のためにしゃべったのか……」

それから先、光が言葉を話すことはなかった。

「……ごめんね、奈緒」

「大丈夫だよ」

嘘はつかない。誰よりも誠実に生きようとする。しかし、汚い部分もあれば、醜い部分もある。奈緒もそれは重々承知していたし、

なくしたいとも思っていた。しかし、奈緒は直感で感じたのだ。  
これから先は、汚い所も認めないと生きていけない、と。  
クリアはその決意に空恐ろしいものを感じた。

## 転生の因果、記憶の煌めき

「……」

奈緒は後ろから聞こえる滴のしたたる音を聞きながら、目を閉じた。

私は人を殺した。

『殺したのは、真登香』

止めなかったのは、私。

奈緒は静かにそう思った。今はもう息だえているであろう光。彼に向けた怒りは正当なものではなかった。死んで、生き返ってからの時間、そのすべての鬱憤と溜まった怒りを彼にぶつけた。そんなことをしてはいけないと、普段は思っているはずなのに。

私はこんなにも醜い人間だったんだ。殺されても、仕方がないか。

『違う。あなたは醜くなんかない』

ありがとう。

奈緒はクリアにお礼を言った。しかし、奈緒の気持ちは沈み込む。

八つ当たり、かな。さっき私がしたの。最低だね、私。

『でも、先に攻撃してきたのは彼ら』

でも、あの人は私の先生を撃つたわけじゃない。……ホント、なんであんなことを……。

奈緒の中では、さっきのことは割り切れているつもりだった。しかし、一番近い隣人は、後悔する奈緒の心を見抜いていた。

「……ねえ、真登香。町はずれの森ってどこにあるの?」

真登香の方を振り向くことなく、奈緒は聞いた。

「うん? 奈緒って行ったことなかったっけ。こっちだよ、ついてきて」

真登香は奈緒の前に出た。その右手は真つ赤に染まっている。彼女が手を力強く振ると、未だ固まり切っていない血液が地に撒かれる。その血液や倉庫にある死体を気にもかけない様子で、真登香は歩き出す。

血のおいが漂う倉庫を後にした二人は、真登香の案内で件の襲撃者たちの本拠地に向かう。

「真登香、本拠地にいる人たちも……その」

「殺すよ。敵は殺す。私は私の身を護っているだけなの。悪いこと? いいえ、違うわ。そうでしょ?」

いくら護身という大義名分があるとはいえ、真登香に罪悪感がな  
いわけではないようだ。そうでなければ、こんな後ろめたい表情を  
するわけがない。

「……うん。悪くなんかないよ」

奈緒は心の底からそう思った。殺されて、殺し返すのは当たり前  
のことで、正しいことだと本気で信じていた。だが……罪悪感がな  
いとは、彼女には言えなかった。

「本当にそう思ってる?」

「嘘じゃないよ」

学校から出てしばらく歩くと、近代的な街並みから切り離されたようにして森があった。手入れが完璧に行き届いていて、この土地が私有地または公有地であることは初めてここに来た奈緒にも簡単に理解できた。

「ここの奥の三連コテージ、だったよね、奈緒」

真登香に聞かれて、奈緒はうなずいた。踏み鳴らされた地面に、綺麗に管理された木々。人工的な雰囲気奈緒は感じたが、同時に美しいとも感じていた。もしこの道のりが他人と殺し合いをするための道中でなければ、ここでランチバスケットでも開いただろう。

『奈緒。奴らと戦う前に、一つだけ言っておきたい』  
なあに。

『今、あなたが使える魔法は攻撃魔法が一種類、防御魔法が一種類、今日一回しか使えない大魔法が一種類』

それだけあれば、十分だよ。

『違う。私が言いたいのは、それらを使えば、奈緒の寿命がどんどん短くなるということ』

……

奈緒はクリアになにもいうことができなかった。

『あなたの魔法はとても協力。ともすれば魔力だけで世界の時空を裂いて、異世界へと旅立てるほどに。でも、その力は寿命と引き換え』

どれくらい使ったら、どれくらい減るの？

『強力な魔法……一日に一回しか使えない大魔法レベルだと、一



か月分の寿命が減る』

私は、三年生きれるんだったよね。

『そう。だから、もしその魔法を使えば、二年と十一か月になる』  
そっか。ありがとう、クリア。

奈緒は頭の中でお礼を言うと、目の前を歩く真登香に声をかける。

「真登香」

「どうしたの？ どこにあるのかわかんないけど、もう少し歩けば見えるかも」

「私、ちよつとくらいなら戦うから。だから、真登香だけが背負わなくてもいいんだよ」

「……」

奈緒の『戦う』の意味は、奈緒のクラスメイトの大半が思っているような軽いものではない。彼らの戦いとは魔法を使った決闘のよくなものを指す。しかし、奈緒の戦いとは、人を殺して、殺されることだった。戦いに勝つということは殺すということ。戦いに負けるとは死ぬということ。だから奈緒は争い事は嫌いだったし、今まで積極的に戦おうとしなかった。

「……ありがとう、奈緒」

けれど、これから先は違う。自分の命を守るため、他人の命を奪うのだ。嫌で嫌で仕方がなかったが、しなければならぬことだと奈緒は割り切った。

『奈緒。前方に人影』

クリアに言われて、奈緒は前方を注視する。確かに、銃火器で武

装した一人の男が暇そうに歩いていた。距離は大体五十メートルほどだろうか。奈緒が走れば八秒はかかるが、真登香が本気を出せば二秒とかからない。

「真登香、前に人が」

「大丈夫、見えてる」

敵であることはその手に持つ武器を見れば明らかである。

「捕まえて、本拠地を吐かせよう。奈緒、お願いできる？」

「え……」

真登香は奈緒のあっけにとられた声を聞くと、そう、とだけ言った。

「私が聞くから、その間奈緒は耳をふさいであたりを見回して。お願いね」

「え、真登香……？」

「嫌だけど、しなきゃいけないこと。奈緒も覚悟したんだから、私もする」

ひゅ、と真登香は一気にその男に近づいてお腹を殴った。彼は苦しそうに銃を落としてお腹を押さえる。真登香は苦しそうにうめく彼の首根っこをつかみ、近くの草陰に消えた。二秒ほどして、男の絹を裂くような悲鳴が奈緒の耳に届いた。

「……！」

あわてて奈緒は耳をふさいで目を閉じた。耳が痛くなるくらい強く掌で押さえつけているのに、男の悲鳴は耳に届いてしまう。また

奈緒の記憶は煌めく。次から次へと生前の自分の悲鳴と苦痛とが瞬いて、心のはじけそうになる。

「はあ、はあ……」

お願い、はやく終わって……。

自分が苦痛を受けているわけでもないのに、奈緒は切実にそう思った。

数十秒が経った頃、ひときわ大きな悲鳴が聞こえ、それきり声は途絶えた。草むらの茂みから、真登香が出てくる。

「終わったよ、奈緒……って、大丈夫!？」

真登香は地面にうずくまってカタカタと震えている奈緒に駆け寄った。

「だ、誰か来たの!？ 何をされたの!？ 大丈夫!？ 奈緒!？」

「あ、ああ……」

奈緒は恐る恐る、顔を上げた。うつろな目からはたくさんの涙が流れ、怯えたような表情。真登香はますます、あたりを警戒した。

「何があつたの、教えて？ つらいだろうけど……」

「も、もう、大丈夫……」

奈緒は真登香にすがりつくように服の裾をつかみ、立ち上がる。

「だ、大丈夫って……」

「大丈夫。昔のことを思い出ただけだから。大丈夫なの」

奈緒は自分の胸を押さえてそう言った。もう悲鳴は聞こえない。だから、大丈夫。無理やりにも、奈緒はそう思った。

「大丈夫に見えないけど……」

「大丈夫じゃなくても、今は前に進んで戦わなきゃ。真登香、案内してね」

奈緒のほほえみに、真登香は悲しくなった。何が真登香をこんなにしたのか彼女には想像もつかない。だから、何も言えず、何もしてやれない。友達なのに。

「……わかった。ついてきて」

せめて奈緒が夜安心して眠れるよう、戦おう。真登香は静かに決意する。

## 転生の終焉、その序曲

二人はそれから数人と戦闘を行い、目的地である三連コテージへとたどり着いた。木製のログハウスのようないでたちは、まるでただの別荘のようで、奈緒たち魔法使いを殺そうとする敵の本拠地だとは、どうしても思えなかった。大きさもそれなりにあって、誰かがしばらく生活するには苦勞しない広さは確保されている。

「……行くよ、奈緒」

「うん」

二人は十分に経過しながら、三つあるうち、一番右のコテージに入る。昼間だというのに、カーテンなどで目張りされているのが薄暗い。二人がコテージの玄関を二歩進んだところで。

「そこまで」

奈緒の後頭部に銃口が突きつけられた。奈緒と真登香は振り返り、愕然とする。三人ほどの武装した男と、その後ろに若い少年が一人、杖を持って立っていたからである。どう考えても、多勢に無勢。震えながら奈緒はおとなく両手を挙げた。

「キミは賢いようだね」

後ろの杖を持った少年が奈緒に向かっていった。奈緒は真登香のほうを見ると、驚く。真登香は両手を上げないばかりか、敵意に満ちた目を彼らに向けているからだった。

「真登香、何してるの!？」

「奈緒こそ！ はやく戦わないと！」  
「無茶だよ！」

銃口は三つ。そのうち一つは奈緒に。あとの二つは真登香に向けられていた。今の状態なら、いくら近距離だといえ引き金を引くの一秒もかからない。さすがの真登香でも、攻撃できるわけがなかった。

「さて、キミたちは何をしに来たのかな？」

「言うもんか」

「……もし口を開かないのであれば、キミたちにそれ相応の苦痛を与えなければならぬのだけど」

「わ、私たちは」

恐怖に突き動かされ、奈緒はすべてを話そうとした。

「奈緒、ダメ！ 言っても絶対殺される！ だから」

「痛いのはいやなの！ 言って殺されるなら、それでもいい！

痛いのは、もう、あんなのをされるのなんて、嫌なの……」

「奈緒……」

怯える奈緒の様子を見て、真登香はそれ以上奈緒を責めることはできなかった。

「……キミから切り崩していったほうがいいかな」

「な、何を、するんですか」

「切り崩すんだよ。文字通り。少しずつ、身体を詰めていくんだ」

ゴクリ、と奈緒は喉を鳴らした。想像できない光景ではない。その時の痛みさえ、奈緒にはリアルに想像できた。

『落ち着いて、奈緒！ こいつらは言ってるだけだから！』  
そんなのわかんないよ！ も、もし、万が一にでも本気で私を苦しめようとしたのなら……。

奈緒は自分が再び肉塊になる姿を想像して、吐き気がした。

「……なんだい、この子は？ 何もしていないのに、涙を流してがたがた震えて。まるで雛鳥のようじゃないか」

「だ、黙って……ください」

奈緒は恐怖のあまり、少しずつ壊れていくのが自分でもわかった。少しずつ普段の自分と違う自分が入り交じり、変わっていく。過去の記憶と今の状況と想像とが溶け合って、混沌としていく。

「ふふふ、偉そうに。おい、そっちを撃て」

少年は真登香のほうを指さすと、指示した。二つの銃口が火を噴いて、真登香の体にいくつか穴が空く。足と、腕。お腹。致命傷ではないが、彼女はもはや動ける状態ではなくなった。

「ぐ……！」

「これで、キミたちは籠の鳥。ボクたちに逆らうことは、できない」

少年が下卑た笑いを浮かべた。何をするつもりなのだろう。真登香は痛みで霞んでいく頭で一瞬考えて、首を振った。そんなこと……

「キミらって、馬鹿だね。女の子なのに、こんな前線に出てくるなんて。捕まったらどうなるかなんて、わかるだろう？」

真登香の不安を恐怖に変えたのは、少年の冷たい笑いだった。真登香は怯えて少し後ずさる。流れた血が小さな川のようになっている。

「……………真登香……………」

奈緒は混乱している頭の中で、真登香に危機が迫っていることを認識した。これから彼女はどうなるのだろう。友達が殺されそうになっているのに、奈緒はその場から一步も動かず、思考をぐるぐると螺旋させる。

まどか……………。

『奈緒、お、落ち着いて。お願い、私まで……………ッ！』

クリアは今まで感じたこともないような強い感情にさらされ、奈緒が今感じている壊れてしまいそうなほど強い感情全てを感じてしまふような気がした。必死で語りかけ、普段の奈緒に戻そうとするが、奈緒は混沌とした思考のままクリアに話を続ける。

もう、おしまい。お薬とか、道具とか、器具とか、身体とか……………。いっばいっばい酷いことされて……………最後には私のことを私だっと思って思いたいくなくなるくらい苦しんで、最後には……………。

奈緒の絶望を、クリアは痛いほど共感していた。同調しすぎて、クリアもその気持ちに引つ張られそうになる。真登香の周りを男たちが取り囲むと、奈緒の視界から真登香がいなくなった。

『奈緒、落ち着いて！』

落ち着いているよ。また、私は肉の塊になるんだな、って思っ



るだけ。

『……嫌なのはわかった！ わかったから、落ち着いて！』

クリアは必死の思いで奈緒に叫ぶ。奈緒の心が少しずつ、黒くなっていく。清い泉に垂らした泥がすべてを侵食していくように。寂しさと記憶が、彼女の心を蝕む。

落ち着いてるよ。むしろ嬉しんだよ。きっと真登香も、私の苦しみを分かってくれる。私の痛みを理解してくれる。だから……。

『奈緒ッ！』

クリアは叫ぶ。奈緒が間違った方向にいかないために。邪悪の埧塙にとらわれる前に。

『もうこの際落ち着かなくてもいい、戦って！ あなたの力で、彼らを打ち倒して！』

できないよ。

『できる！ 私が手伝う！』  
でも。

奈緒はためらっていた。死ぬのが怖いのではない。殺されるのが怖いのではない。痛みが、苦しみが怖いのだ。

……もっと怖いものが、あつたはずなのにな。

奈緒はちらりと思った。死んでからこっちというもの、死ぬ瞬間の記憶が強すぎて、それ以前の記憶はかなり薄れてしまった。その中に、けして忘れてはならない気持ちがあつたはずなのに。

私が一番怖かったもの。なんだったっけ？

そう思った時、真登香が奈緒の名前を叫んだ。

『奈緒！ 見捨てないで！ お願い、真登香を助けて！』

……！

奈緒はハッと、真登香のほうを注視した。男たちに取り囲まれ、小銃を突きつけられてはいる。今まで何を呆けていたのだろう。奈緒は少しだけ大事なことを思い出せた。自分の恐怖にばかりとらわれて、友達が今、ここで助けを求めているのに。自分は何をしていたのだ。奈緒は後悔と同時に走り出した。急に動いた奈緒に驚いた男が引き金を引くが、銃弾は奈緒の腹をかすめるだけで、大したダメージはない。痛みは際限なく襲ってくる。けれど、奈緒はそれを無視できた。

「……やれ」

「待つて！」

少年の号令と同時に、男たちは引き金に指をかける。真登香が殺されてしまう。止めないと！

伸ばした手は、銃弾には届かない。男の服にもかすらない。感じるのは無力。想像するのは赤き友。奈緒は、その想像を振り払おうと、必死の思いで手を突き出す。少しずつ、しかし着実に。引き金が引かれるその瞬間まで、奈緒は走る。奈緒は、先生が殺された時と同じような感覚を味わっていた。絶望と共に訪れる、時間の遅滞ゆっくりと、ゆっくりと。けれど、今は先生の時とは違い、奈緒は普段と同じように走ることができた。ゆっくりと流れる時の中を、普段通りに。

真登香を、助けないと！

最初の友達。最初に話しかけてくれた不思議な少女。最初に命を救ってくれた強い娘。死なせはしない、絶対に！

奈緒は自分の意識では普段通りに走っているつもりだった。奈緒以外の人間が見ればそれは、弾丸のように速かった。

## 転生の終結に向けて

時間がゆっくりと過ぎていく中、奈緒は木製の床を走り、男たちをかき分けて真登香を抱きかかえ、銃の射線から外した。これで真登香に弾が当たることはない。そう奈緒が思った瞬間、奈緒の中の時間は普段と同じように流れ始めた。それと同時に、数発の銃声が狭いコテージの中にとどろいた。

「はあ、はあ、はあ……」

『奈緒！？ 何やってるの！？』

無我夢中だったただだよ。

驚いているのはなにもクリアだけではない。男たちも、杖を持った少年も、真登香もが驚いていた。

「な、奈緒。助けてくれて、ありがとう……」

「大丈夫だよ。早く逃げよ。殺されちゃう……」

奈緒は真登香に言いながら、周囲を見回す。このコテージにある窓は三つ。その全ては、人が通れるような大きさをしていなかった。逃げれる場所は、出入り口ただ一つ。だが、そこには冷笑を絶やさない少年が立っている。彼を倒さなければ出られない。奈緒はそう思った。

「……あなたは、誰？」

奈緒は少年に話しかけた。

「僕はグラウベン」

「……………あなたが？」

奈緒は目を見開いた。魔法学園を襲撃するように指示し、武器を調達した魔法使いが、自分たちと年が変わらないような少年だったなんて。

「僕のことはどうでもいいじゃないか。どこから武器を手に入れたかとか、なんで学園を襲ったのか、とか」

「どうでもよくなんかない……………！」

うめくような声を、真登香は上げた。

「……………答えないけどね」

「ぶち殺す」

奈緒が初めて聞いた、真登香の殺意だった。真登香の体は殺意を晴らす敵を求めるかのようにびくびくと脈動するが、身体を起こすことすらできない。血を流しすぎたんだ。奈緒は真登香の銃創と出血をみてそう判断した。

「元気な人だ。もう死に体だけど。で、不思議な術を使ったキミ。名前は？」

「神崎」

下の名前を、奈緒は名乗らなかった。それなりに気に入っている自分の名前を、目の前にいる少年に呼ばれたくなかったからである。

「そう。神崎は、どうやってあんなことを？」

「あなたが学園を襲った理由と武器をどこから調達したのかを答えるほうが先です」

奈緒は気丈にふるまった。男たちは奈緒のほうに向けてはいるが、撃つていいのか判断できないらしく、始終グラウベンのほうを見ていた。この状況が怖くないわけではない。だが、強く見せなければ。奈緒はいざとなれば魔法がある、という樂觀から、そんなふうに思考していた。狐は虎の威を借らねば威張れなかったように。奈緒という個人だけでは、目の前にいる少年は恐ろしすぎた。

「学園を襲った理由？ 復讐を手伝ったってだけ」

「……そうなんですか」

「信じるの？」

「……嘘なのですか？」

奈緒は強く出ようと思った矢先、その疑心のなさが災いしていた。先ほどは強く強く思っていたから疑うことができた。しかし、今はいろいろなことに気を配りすぎて、普段やっていない『人を疑う』ということにまで気を回す余裕はないのである。

「嘘に決まってるじゃん。面白いね、キミ」

「私はちっとも面白くありません」

クリア。攻撃呪文お願いできる？

『わかった』

話をしながら、奈緒はクリアに頼む。ここで不意打ちで魔法を唱えれば、勝機はあるかもしれない。

『『万能』なる魔力を持って、敵の『幸福』を『転化』し、『苦痛』によって『終焉』となれ！』

奈緒の頭の中で、心地のよい詠唱が響く。クリアが叫び終わった時点で、奈緒は手をグラウベンの方へと向けた。

「理由を言わないなら言わないでいいです。とにかく……私の平穏を奪わないで！」

『ユースフルテットペイン！』

奈緒の手から不可視の力場が発生し、グラウベンに向かって行く。効果も、威力も奈緒は知らない。

「イヤ」

けれど、頼り切っていた魔法がなんなく無力化されて、奈緒は信じられないくらいに焦っていた。動悸が激しくなり、どうすればいいのかを必死の思いで考える。

『……なんで。嘘。私の魔法が……』

魔法を構築した本人も自信があつたらしく、いたくショックを受けていた。焦る奈緒は、できるだけ早くに別のことを考えていた。

「さて、武器をどこから入手したか、だったか。これは教えても構わないかな」

余裕の様子でグラウベンは語り始める。急に言を翻した彼に、奈緒はいぶかしげな表情を作る。

「異世界の人間と交渉したのさ。簡単だったよ。連中、『バイヤー』とか『ヤクザ』って呼ばれてる職業でさ、銃とか横流ししてくれたんだ。女の子で楽しんだ後だったから、気分よく売ってくれた

よ。もちろんお金は魔法で作ったんだけどね、あははは！」

彼は心底可笑しそうに笑いだす。心底気分の悪そうな顔をしていう奈緒と真登香を無視してひとしきり笑った後、彼はそういえば、と不思議そうな表情になって奈緒に言った。

「その女の子なんだけどね、僕もさせてもらったよ。運よく最初のほうからできてね。奈緒って名前の子でね、キミたちみたいにめちゃくちゃかわいい顔してるんだけど、最終的に首から下は赤い塊になるの。顔も真っ赤だったけどね。『助けてくれたらなんでもします』とか、ほかにも面白いこと言っちゃってさ。めっちゃめっちゃ笑えるでしょ！？ あはは！」

ぞくり、と奈緒の背筋が凍った。真登香も、目を見開いて奈緒を見ている。真登香は知らないのだ。奈緒がなぜここにいるのかを。

「うん？ その顔はなにさ？ あ、そうそう、せっかくだから魔法器具にその子の映像とってきたんだ。見る？ いろんな人に見せてるんだけど、誰も理解してくれなくて。キミたちならもしかしたら、ってね」

いかにも寂しそうな声だったが、グラウベンの表情は、理解されなくてさびしい、というようなモノではなかった。理解されないのは百も承知。そんなことよりも醜悪な映像を見た時の、気持ちが悪そうな表情のほうが嬉しい。そんな、嗜虐に満ちた表情だった。

「……あ、あなた、は……」

グラウベンは杖の先で床を叩いた。すると、奈緒たちの目の前に映像が現れた。そこは、どこかの廃工場。そこに映る色は赤と肌。



それに映っているのは、綺麗なままの奈緒から、死ぬ寸前の奈緒の姿になるまでのダイジェストだった。最後のそれは、真登香が倉庫で殺した四人よりもさらに醜悪な物体になったただの『赤』だった。

「……」

奈緒は一筋涙を流した。いろんなことを感じすぎて、詳しい感情に大別するのは不可能に近かった。

「ひ、酷い……！ あんたら何考えてんの！？」

あまりに残酷な映像に、真登香は思わず叫んだ。

「最低だなんて。別に、僕はただ死体を……いや、この時点じゃまだ生きてるのか。人間ってすごいよね。心臓と肺、脳さえ無事なら数秒ぐらいは生きていけるんだから。こんな状態でも痛みを感じ続けるなんて、ほんとこの子には同情するよ」

うそつき。奈緒は心の中で叫んだ。嘘つきめ。心の底から愉しんだ癖に。奈緒は心の中で絶叫した。

「い……生きてるの、この子」

「死んだよ。これ撮ってもうしばらく遊んだら、死んだよ。最後は顔をハンマーで潰してね。そうしたらホント、あとに残ってるのは赤い塊だけでさ、人間ここまでぐちゃぐちゃになるのかって」

「黙って」

奈緒は真登香はやさしく地面に横たえると、静かに立ち上がる。

「どうしたの？ 気持ち悪すぎて吐きそうになった？ それとも、

まったく見ず知らずの他人が殺されただけで、怒ったのかな？ それなら魔法使いやめたら？ 損するよ？」

「黙って」

奈緒は静かに言う。もう奈緒にとっては、魔法使いだとか普通の人間だとかそういうことはもう頭の中から抜けていた。杖を左手で持ち、右手を空ける。

「うん？ ま、いいや。そうそう、僕が学園を襲撃した理由だけど……。正直ね、魔法使いとか僕さえいればそれでいいんだよ。ヒエラルキーの頂点にいる種族は少なければ少ないほどいいんだ。食物連鎖の頂点にいる人間のトップに、僕は立つ。そのためにはキミたちその他大勢の魔法使いが邪魔なんだ」

「黙れ」

奈緒は今、自分がどんなものなのかわからなかった。クリアの体に乗っ取った『奈緒』なのか、殺された奈緒を悲しむ『人間』なのか、怒りと殺意を身に宿らせ、自身を殺した敵に復讐することしか考えていない『化物』なのか。

奈緒は、そのどれでもあるだろうし、どれも違うような気がした。

「どうしてキミはそんなに怒っているの？ わけを聞かせてよ」

「私は、神崎」

右手に、力が宿るのがわかった。その力が魔力だということは、感覚でわかった。

「知ってるよ」

「神崎、奈緒」

「……」

グラウベンの顔が歓喜の表情に変わるのを奈緒は見た。より一層、右手に宿る魔力は増えていく。

「へえ、キミが！ キミが神崎奈緒！ つまりあれか？ 転生したのか！？ その宿主の体に乗っ取って！ あははは！ 僕も大概だがキミも悪人だな！ あはははは！」

「……」

奈緒は反論しなかった。彼女は身を燃え上がらせる激情に身を任せ、グラウベンに突っ込んでいく。集中しているからなのか、何かの魔法をクリアが使っているからなのか、奈緒の中の時間はほとんどゆっくりになっていく。奈緒はすべてがスローモーションで動くその中で、悠々と普段通りに動き、グラウベンの後ろについた。

膨大な魔力を宿した右手を振りかぶる。

「あなたが、私を……」

その手を振り下ろそうとしたとき、奈緒の体に痛みが走った。

「……」

グラウベンの方を見れば、彼の背中から何本もの半透明の槍が生じ、奈緒の体の数か所に穿孔痕を作っていた。そこから、堰を切ったように血が流れてくる。あわてて後ろに跳ぶと、奈緒の中の時間をもとに戻る。

「うーん。話の途中で攻撃してこないですよ。てか、その不思議な力、別に万能ってわけじゃなさそうだね。護身用の魔法が効くんだから、きつと普通の魔法も効くだろっね」

そう言ってグラウベンを手を奈緒のほうへと向けてきた。それだけで、奈緒の体に痛みが走り、身体に穿孔痕ができる。魔法の知識のない彼女にとって、何をされているのか理解することは難しかった。いや、魔法に精通しているクリアでさえ、その魔法が何なのかわからなかった。あまりに魔法の速度が速すぎて、見ることはおろか魔力を感じ取ることすらできない。

「クリア、さっきから何やってるの!? 早く何か魔法を構築しないと……!」

いい。私一人でやる。

奈緒はもつと右手に魔力を宿らせる。さっきは感情と共に宿っていたものが、今では彼女の意思で宿るようになっていく。その変化がどれほどのものか、奈緒自身は気づいていない。

「なんで、なんであんなことしたの?」

魔力を宿らせながら、奈緒は涙声で聞く。今の奈緒は、理性のすべてをかなぐり捨て、感情のみで行動している。

「なんで? いや、もとは銀行強盗の目撃者を消すのが目的だったらしんだけどさ、その子、いや、キミか。キミが銃突きつけただけであんまりにもいい声で啼くもんだから、みんな熱入っちゃったみたい」

奈緒は右手に宿る魔力が一層強くなるのを感じた。奈緒は涙を流し、グラウベンを鬼のような形相で睨みつける。

「そんな、そんな理由で! そんな理由で私を!」

「どんな理由だったらお好みだった？　ずっと前からキミが好きで、好きすぎてあんな行動に出ちゃったんだ。とでも言われるのが好きなの？」

「黙れ！　私は、まだまだしたいことがいっぱいあったのに！」

奈緒はグラウベンに突っ込んでいく。右手を振りかぶり、その右手は体でかばいながら。

「ふうん」

彼が杖を一振りすると、奈緒の左手や左わき腹、左足などに穴が空く。いくら奈緒でも、見えない力で攻撃されているというのは十分理解できた。激痛が襲い、血が流れ、今にも全身から力が抜けそうになるが、奈緒は無理やり体を動かす。

「私は……あなたを許さない。あなただけは、絶対につ！」

「赦しを乞うつもりはないよ。……で、覚悟はできた？　捕まっ

たらまた死ぬよ？」

「それが……脅しになると思っなああああああああ！」

奈緒はがむしゃらに、グラウベンに突撃する。一瞬彼は驚いたような表情を見せたあと、杖を一振りする。

「あああああああ！」

不思議な力が放出される。奈緒は大声で叫んで、右手の形を握りこぶしにする。たった一つだけ『覚悟』を決めると、再び足で地面をける。不思議な力の攻撃を食らいながら、時間の流れはゆっくりになる。グラウベンはおるか、すべての物が止まったように動きを鈍らせる。

奈緒はその中で、一直線にグラウベンに向かった。血だらけになりながら、一つの意思だけを行動原理にして。

「……………」

心の奥底からの叫び声は、声にならなかった。自動で発動する不思議な力で全身貫かれ、息すらも困難になったのだ。それでも奈緒は、さらに痛みが増すのを承知で前に進む。目がかすみ、もう目の前にいる少年の姿さえもぼやけるほどに視力が落ちる。

あと一步……………！ あと一步で、届く……………！

「う……………ぐうあッ！」

奈緒は今まで蓄積した魔力を乗せた、右こぶしをグラウベンのみぞおちに叩き込んだ。めりめりと体の中に奈緒のこぶしが入り込み、一気に魔力が解放される。

グラウベンはその場で一度震えた。

「……………はあ、はあ、はあ……………」

時間がもとに戻っても、彼は動かなかった。ふらりとバランスを崩すと、受け身も取らず、木の床にあおむけに倒れる。そのみぞおちには、巨大な穴が空いていた。

「はあ、はあ、はは、はは……………はははは……………」

奈緒は自身の右手を見た。血に染まっているが、これは誰のものか。奈緒にはわからなかった。生暖かい感触が、奈緒の右手ずっと残る。

「ひ、ひい、あ、あいつ、やられたぞ？」  
「ど、どうする？」

カタカタと怯え始めた男たちに、奈緒は一にらみして手をかざす。

「！」

それだけで、男たちは銃を捨てて逃げてしまったのだ。

「は……はは、真登香、終わったよ……終わったのに……」

一歩、奈緒は歩く。それと同時に床に膝をついてしまう。

「奈緒！？」

「終わったのに、私は……」

真登香は這って奈緒のそばまでくる。その途中にあるグラウベンの死体は、カづくでどける。

「……真登香……」

『奈緒、さっきから何をやってるの！？ 呪文なしで魔力を垂れ流しなんてしたら、どんどん魔力が……！』

クリアのおろおろするような声を聞いて、奈緒は少しだけ微笑んだ。

あとどれくらい、寿命残ってる？

『もう一か月も残ってない！ 何考えてるの奈緒！ 今だって体の傷を治そうと自動で魔力が勝手に……！』

私の傷全部治したら、どれくらい魔力残る？

『それからさらに三日は減る!』

じゃあ、真登香の傷を治したら?

『三週間! お願いだからやめてよ。こんなに短い期間でお別れなんて……そんなの奈緒だっていやでしょ?』

クリアは最後のほうには声が震えていたのがわかった。

「な、奈緒、大丈夫!? き、傷が! 早く治しにいかないと…

…!」

「いいよ。私は、ここで自力で治すから」

奈緒はやさしく微笑んで、真登香の提案を断った。

「な、なんでよ! ちょ、ちょっと待っててね、すぐ学園の人呼んでくるから……」

「聞いて、真登香」

奈緒は、無理にでも立ち上がろうとする真登香を引き留めた。

「なによ? 言いたいことあるならあとで……」

「私ね、本当はクリアじゃないの」

「そんなの」

「演技じゃなくて、本当に」

奈緒は真登香の手を握った。血に汚れた右手ではなく、きれいなはずの左手で。

「少しだけ、話、聞いてほしいんだ。いい?」

「……でも」

「私は大丈夫だから。ね?」



左手に魔力をためながら、奈緒は願う。真登香の傷がよくなりま  
すように……。

『奈緒、やめて、やめて！ 真登香は大丈夫だから！ 奈緒の寿  
命が……！』

奈緒は自身のいきさつを真登香に語りながら、クリアに向って思  
った。

私……今度死ぬなら、意味のある死がいいから。

奈緒のほほえみは、いつそう深くなる。

## 転生の結末

「……私はね、グラウベンが言ってた女の子なの」  
「そ、それって」

奈緒はすべてを包み隠さず語る。つないだ左手から魔力を垂れ流し、それを真登香の治癒力に変えながら。

「ごめん、真登香。私、あなたの親友を……」  
「だから、あなた拷問することをあんなに……。ごめん」

奈緒は目をぱちくりと瞬かせた。親友を殺した知らない誰か。そう思われて、拒絶されると思っていたからだ。

「真登香、私の心配をしてくれるの？」  
「うん。クリアは、いつも言ってたから」  
「え？」

奈緒の疑問は余計に深まる。

クリア、どういうこと？  
『どういうこともこういうこともない！ 早く魔力を流すのをやめて！ もう真登香は死なないから！ 立って戦うことすらできるから！ だから！』

クリアに耳触りなほど心の中で叫ばれて、奈緒は魔力を流すのをやめた。

「真登香、傷大丈夫？」

「え？ あ、うん。だいぶ良くなったから」  
「よかった」

奈緒はにつこりとほほ笑んで、つないだ手を離した。奈緒自身の傷も、かなり治癒していた。

それで、なんで真登香は知ってるの？

魔力を流すことをやめると、クリアはもう普段通りの口調に戻っていた。

『話していたから。何度も何度も、人格を変えるたびに、私はいつか私で無くなるかもしれない。でも、私はずっとここにいる。だから、私でない私にも、普段通りに接してあげて、と』

つまり、真登香は奈緒が、いや、奈緒が来る前から、クリアがある日突然別人になることを知っていたのだ。

「じゃ、帰ろうか」

真登香は立ち上がると、奈緒のほうに手を差し伸べた。その動作によどみはなく、戦闘ができるほど回復したというクリアの言葉に嘘はないようだ。

「で、でも、私、クリアじゃなくて、全然知らない別のだけか？」  
「私は、二人に言ったんだよ」

『……真登香』

奈緒はクリアのこんな嬉しそうな声を聞いたのは初めてだった。ああ、そうか。真登香がクリアの親友であるなら、逆もまた同じ。

親友と話せなくなっただけさびしいのは、クリアも一緒だったんだ。奈緒はそう納得した。

「嬉しいみたい、クリア」

「……そう。それならよかった。奈緒、ありがとう」

奈緒を抱きかかえるようにして立ち上がらせると、真登香は奈緒を思い切り抱きしめた。

「……え？」

「辛かったね。今までひどいことさせてごめんね。私、知らなくて。だから、奈緒がまさかあんなことされてるだなんて……」

初めて、奈緒はその言葉をかけてもらえた。やさしい、ねぎらいのような言葉。真登香の優しさは奈緒の凍りかけていた気持ちをさらさらと溶かしていく。

「……ぐすっ」

奈緒も真登香を抱きしめ返し、静かに涙を流す。今まで感じてきた辛かったもの、苦しかったこと、それらが少しずつ溶け出すような、そんな感覚がした。

「……もう、奈緒は普通に暮らしていいんだよ」

「……ダメ」

ハッと、その言葉で奈緒は気づく。

「なんで？」

「私は、人殺しだから。人殺しが、人を殺していない人と一緒に

暮らすのは無理だよ」

「じゃ、私も一緒だね」

奈緒はためらいがちに頷いた。後ろ暗いことがある者同士、仲良くやっていきましょう。そんな真登香の思いを感じ取ったからだ。

「奈緒は、何かしたいこととかある？」

「え？」

「ほら、完全にこっちの事情に巻き込んだじゃない。だから、今度はそっちの事にも、ね？」

真登香に言われて、奈緒はしばらく逡巡して、口を開いた。

「元の世界に、帰りたい」

『ダメ！』

急にクリアに叫ばれて、奈緒はピクリと肩を跳ねさせる。

「大丈夫？」

「え、あ、うん」

なんで？

『魔力がぎりぎりなの！ 今あなたあとどれだけ寿命が残ってると思ってるの！？ あと三週間くらいしか生きられないのよ！？』

異世界……私の世界の戻るには、どれくらいの魔力がいるの？

『わからない！ わからないからダメって言うてるの！ もしかしたら異世界に行こうと時空の壁引き裂いた瞬間死ぬかもしれないのに、させられるわけじゃない！』

……そう。

じゃあ、と奈緒は口を開いた。

「私、もう少しだけしたいことがあるの」

「帰らなくていいの？」

「帰るために、必要なことなの」

真登香は一瞬不思議そうな顔をしたが、すぐに真摯な表情になって、真登香を見つめる。

「じゃあ、何が必要なの？」

「私の魔力を補給する方法を、どこかから探さないと」

驚いたのは真登香だけではなかった。

『奈緒？ 何考えてるの？』

三週間で、見つけないと。クリアの体に魔力を供給する方法を。

「……魔力、補給できないの？」

真登香は全然別のことで驚いていた。今度は奈緒が驚かされる。クリアのことは何でも知っているものだとばかり思っていたからだった。

「う、うん。でも」

「……何がなんでも見つけないと。あとどれくらい魔力残ってるの？」

「え、えと、あと三週間分……」

奈緒の言葉を聞いて、真登香は目を見開いた。奈緒の肩をつかみ、必死の形相で睨む。

「なんで今まで言わなかったのよ！ あと三週間！？ さあ、今すぐ準備しに行くわよ！」

「ど、どこに？」

「どこへでもよ！ 古今東西ありとあらゆる方法を試して、魔力が補給できるかどうかを試さない！ さあ、行くわよ奈緒！」

そのまま真登香は奈緒の手をひつつかみ、コテージを出て、ずんと森の中を進んでいく。

「ま、まって、真登香！」

奈緒はそう言って戸惑うが、その表情は明るかった。本気で真登香が心配してくれているのがわかったからだ。

「……とにかく、何が何でも見つけるのよ。魔法も超能力も異世界もあるんだから、魔力を補給する方法くらい、簡単に見つかるはず！」

真登香は奈緒の手をつかんだまま、森の中を学園の方向に向けて歩いていく。

「……ありがとう、真登香」

微笑んだ奈緒の表情は、まるで生前のように明るかった。

見つかるだろうか。奈緒は少しだけ疑問に思う。もし、最後の三日になっても見つからなかったら、どうしよう。暗いことは次から次へと思いつく。

大丈夫だよ。クリアもいるし、真登香もいる。二週間あれば、私だって少しくらいは。

けれど、明るい希望も同時にあった。

『……………奈緒』  
なあに？

学園の校舎に入る前、クリアが奈緒に語りかけてきた。

『その体は、あなたの物。私のじゃない。だから、魔力を供給する方法がわかってても、私に返そうなんて思わないで。わかった？』

え、あ……………。

『わかった？』

……………うん。

有無を言わせぬ強い口調に、奈緒は思わずうなずく。

『私が探したことがあるのは言うていくから、少しは効率よくなると思う』

ありがとう。

奈緒はお礼を言つと真登香のほうに話しかけた。

「ねえ、真登香、もういいよ。ありがとう」

「何が？ まさかあきらめたんじゃないわよね？」

奈緒は首を振った。

「手、ありがとう」

「え？ ……あ、う、ごめん、つい夢中で……………」

真登香はあわてて手を離した。あわあわとする真登香の様子をほ



ほえましげに見つめながら、奈緒は言った。

「私、あきらめないから。だから、ちょっとした間だけに付き合ってね」

「お安い御用よ」

真登香はにっこり口角だけを上げて笑うと、学園の中に入っていった。

奈緒も、それに続く。

『クリムネア・スターライトの登校を確認』

『崇 真登香の登校を確認』

この不思議な名前も、最後には慣れていくといいな。奈緒はそう思うと、真登香のほうへと歩いていった。

時は流れる。最後の願いを、叶えるために。

## 最後のお話〜二つの世界にまたがって〜

「ね、真登香。明日で三週間だよ」

「ん、そうね」

奈緒の家の奈緒の部屋で、真登香と奈緒と二人はお互いリラックスして各々好きに過ごしていた。奈緒はベッドの上で魔法の本を、真登香はソファアの上で漫画をそれぞれ読んでいた。

クリア、魔力のほうはどう？

『問題ない。潤沢にある。今なら世界を滅ぼしても魔力を使い切らない』

あはは、そんなにいらないよ。

最後の一週間になってようやく手にした魔力の供給方法。そのおかげで、奈緒はこうして楽しく真登香と過ごしているわけだ。もしその方法を見つけていなければ、今頃奈緒は泣き叫んでいたかもしれない。

「今までありがとね、真登香」

「何よ、急に」

奈緒は魔法の本をぱたりと閉じるとベッドから降りた。

「私、自分の世界に行ってみるね」

「……帰ってくる？」

「すぐにね」

奈緒はきっぱりと言った。今、奈緒にはここがある。しかし、も

との世界に奈緒の居場所はないのだ。戸籍はおるか、友達も奈緒の想い人も、今の奈緒を奈緒と呼ぶのには抵抗があるだろう。それならば、一目だけ見て帰ろう。そう奈緒は考えていた。

「じゃ、ちよつと行ってくるね」

そう奈緒が言って杖を虚空から取り出すと、真登香は可笑しそうにぶつとふきだした。

「どうしたの？」

「いや、何も。ああ、やっぱり奈緒だなんて」

「え？」

「クリアは魔法を使って異世界の神様と契約するときでも、そんなふう to 買い物行くような気軽さで言わなかったもん。やっぱり奈緒って独特だね」

奈緒はなんだかうれしくなった。真登香が自分を認めてくれたよ  
うな気がしたからだ。

「ふふ、ありがと。じゃ、行ってくるね」

奈緒は杖を上に掲げると、それに自身の魔力を大量に放出する。  
二秒ほどでそれは恐ろしいほどの密度に増し、集まった魔力は少  
ずつ時空をひずませていく。

魔法の本いっぱい読んだけど、これが一番。

『ちゃんとした魔法も使えるようにならないとね。奈緒の因果は  
結構汎用性高いんだから』

そういうクリアの声色はどこか嬉しそうだった。まるで、姉が妹

に対して言つような感覚。

ふふ、私はこれでいいの。

一層魔力が強まると、時空のひずみも大きくなる。

世界ってどうやって移動するの!?

『よく見て考えて』

奈緒は言われた通り、時空のひずみの奥を見る。いろんな映像の円が、白い何も無い空間に散らばっていた。

あれが世界?

『おそろく。あなたの世界を選ぶのは至難の業だけど』  
やって見せる!

「『我』誠実』なる魔法使い。我は望む。『万能』なる我が力も  
て、我が望み、我が大願を成し遂げたまえ!』……えきや!？」

魔法を唱え終わったと同時に、奈緒の体は時空のひずみに吸い込まれた。それと同時に、奈緒の部屋にあったひずみは音も立てずに閉じた。

な、なにここ!?

『魔法使いとしては及第点。でも、あなたレベルの魔力を持つ人間の魔法詠唱とは言えないわね。ちなみに身内びいき込々での評価ね』

え、厳しくない?

奈緒の体は動かさうにも動かさず、一定の速度を保ちながら一つの

場所に向かっている。

『これでも甘い方。もしあの呪文詠唱を学園の教師が聞いたら間違いなく落第点を与えるはず』

うっ……だから、私はただ魔力流すほうが好きなんだよなあ……。『普通の人はそれができないんだけどね。もうすぐでつくみたい』

奈緒が視線を進行方向に向けると、だんだんと近づく映像の円があつた。

え、あの世界が私の故郷なの？

『さつきあなたが魔法を唱えたじゃない。詠唱は酷かったけど、結果だけ見たら世界最高峰。誇つていいと思う』

あはは……

奈緒は魔法に関してだけは素直に喜べなかった。何をやってもらはクリアの体だから、で説明がつくからだ。

『……あなたの世界に帰ったら、まずは何をする？』

そう……ね。まずはやっぱり……

『復讐？』

それもいいかも。なんてね。しないよ、復讐なんて。

奈緒は冗談めかして言った。それとほぼ同時、奈緒の頭が目的の円に触れ、奈緒はいきなり外に放り出される感覚を味わった。驚いて思わず目を閉じた。再び目を開けると、広がるのはコンクリートの地面。

「うわっ！」

奈緒はあわてて魔力の層を手にとり、落下のダメージを軽減した。ゆっくりと立ち上がると、用心深く周囲を見回す。

「……ここは」

よく見知った街並み。十六年間住み続けた街の様子が、奈緒の眼前にあった。

「……帰ってきたんだ」

奈緒はきよろきよろとあたりを見回す。探していた自分の家はすぐに見つかった。あわてて駆け寄ると、塀の表札を確認する。

「……」

そこには当たり前のように『神崎』という木製の表札がかけられていた。奈緒は自分の頬に温かいものが流れるのを感じた。

「……キミ、だあれ？」

「え？」

後ろから声をかけられて、奈緒は振り向く。少し警戒態勢だったのは、自分が死んだ世界だからだろうか。しかし、声の主を確認すると、奈緒の警戒は一気にほぐれる。

「……あ」

「どうしたの？ ……奈緒に何か用なの？」

奈緒は首を振った。その人物は奈緒が生前よく知る友達……由香里だった。

「じゃあどうして？」

「由香里に会いに来たの」

見知らぬ他人に名前を言われ、彼女は目に見えて警戒する。

「……奈緒を殺した奴の仲間？」

「違う。私は奈緒なの」

「ふざけないでくれる？ あんたどこの子？ 名前は!？」

由香里は真剣に怒っているようだった。奈緒は嬉しい反面、悲しくもあった。

「わ、私の名前は神崎奈緒!」

「ふざけないでって言うてるでしょ! あの子はもう!」

「……由香里、私の死体、見れた？」

由香里はさらに不快な表情を見せた。

「何言ってるの!？ 私は奈緒の友達でしかないから、家族以外は」

「棺の中見た？」

「……」

由香里はきつと葬式に参加している。奈緒はそう確信していた。だから、奈緒はとにかく信じてもらおうと、奈緒しか知らないはずのことを言っていく。

「そもそも、棺、ちゃんとあった？」

「……なんで、あなた」

「警察の人、なんて言ってた？」

「警察？ ……確かに、来てたけど……」

由香里はどんどん、目の前の少女に疑問を持って行った。

「私、殺されたんだよ。知ってる？」

「し、知ってるよ！ なんなのあなた、いきなり現れて奈緒を名乗って！」

「私は、奈緒なの。私、嘘はつかないよ、絶対に。お父さんとお母さんに言われたんだもん」

その言葉が、由香里の中の疑問を変えていく。奈緒のふりをしただけか、から、もしかしたら奈緒かもしれない誰か、に。

「……本当に、奈緒？ あなたの、好きな人は？」

「優だよ。告白しなかった理由は、彼女がいるかも知れなかったから。で、どうなの？ 参列に彼女とか、来てた？」

「う、ううん。それらしい人は来なかったよ」

思わずそう返して、由香里はハツとなった。

「……なんで、とか、今まで何してたの、とかは聞かない。聞かないけど……」

「何、由香里」

「……ごめん。あの日、せめて私が一緒に帰ってあげてれば……」

悔しそつに、彼女は涙を流した。ずっと、今までそれが由香里を苦しめていたのだろう。

「大丈夫。私は……」



奈緒は、今まで誠実に生きていこうと努力していた。ずっと、ずっと。たとえ友人に疑われそうになった時も、今でさえ。けれど、奈緒は。

「私、意外とあっさり死ねたから。何も、由香里が心配するようなことはないから」

奈緒はにっこりとほほ笑んで、そう言ったのだった。自分が由香里を苦しめるような事実を告げるくらいなら、嘘をつこう。たとえ誠実で無くなっても、友人を苦しめる友人にはなりたくないから。

「……ホント？ ……奈緒にそれを聞くのは、おかしいよね。奈緒、嘘ついたことなかったのに」

「うん。私、これで安心していけるよ」  
「どこへ？」

奈緒はにっこりと笑った。想い人……優の姿も見ておきたかったが、そんなことをしたらこちらの世界にいたくなってしまう。それではだめなのだ。

「この体の世界へ。私、この世界に居場所ないから」

「あるよ！ 私が、優が！ 絶対にあなたの場所を作って見せるから！」

「……ごめんね」

奈緒は、一瞬だけ心がぐらりと揺らいだ。けれど、奈緒は二人のために、この世界を去ることを決意した。

「……『世界よ』」

奈緒は杖を天に掲げると、短く、力強く詠唱した。一瞬ですさまじい量の魔力が空中へとはなたれ、時空をひずませる。奈緒は来た時と同じようにそこへ入ると、由香里が入ってこれないようにあわてて閉じた。

「……………由香里、優……………」

「……………あなたが望むなら、あの世界にいてもよかったのに」

「ダメ、ダメなの！ 私は人殺しで、真登香とは一緒にいれるけど、普通の人とは一緒にいれないの！ 私は、私を殺した人たちと同類だから……………」

奈緒は何度も嗚咽をこぼしながら、再び帰る魔法を唱える。

「私はもう、あの中には入れない……………ずっと、クリアの世界で生きていくの。人殺しだから。罪を犯したから。嘘もついてしまった。あの人たちと一緒にいい理由なんて、何もないの。だから……………」

うわごとのようにつぶやきながら、奈緒は時空を漂う。

「……………気にする必要なんてない。嘘なんて誰でもつくし、人殺しだって、自己防衛の後払いみたいなもの。あなたに罪はない。だから、あの人たちと一緒にいても……………」

「それでも、あの人たちは『本当にこの子は奈緒なのか？』って疑問を常に持ち続けるんだ！ もしふとした拍子に、あの人たちが私を私じゃないって言い出したら！ そうなったら本当に私は……………！」

奈緒の叫びは、最後は声にならなくなっていなかった。

『……奈緒。気持ちは……よくわかった』  
「……ありがとう」

ひとしきり叫び終わると、奈緒は少しだけ吹っ切ったような顔になった。

「……ただいま」

時空のひずみを抜けると、来る前と同じく、真登香がソファで漫画を読んでいた。

「お帰り。友達とは会えた？」

「うん。変わってなかった」

「ふうん。なんで向こうにいつかなかったの？」

「……あの人たちと私はもう、違う世界の住人だから」

「……そう。これからよろしくね、奈緒」

真登香はそっけなさそうに言った。けれど、その視線は奈緒をしっかりと見つめていた。

「うん。よろしく、真登香」

奈緒はそういうと、先ほどと同じようにベッドにの転がり、魔法の本を開いた。

クリアも、よろしくね

『……わかった。よろしく』

奈緒は一度目を閉じ、静かに涙を流した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5089t/>

---

転生アード異世界ライフ！

2011年7月13日21時44分発行